



語り継ぐ足尾1

—生沼勤氏の語りともこ—

## 栃木県地図



語り継ぐ足尾1

—生沼勤氏の語りとともに—

# 目次

まえがき

1. 足尾町の堆積場(足尾歴史館) 4
2. 足尾銅山観光 8
3. あしお四方山話 1 (中才へ向かう道中) 12
4. 中才浄水場 16
5. 中才から小滝へ 20
6. 朝鮮人強制連行犠牲者慰霊碑 24
7. 小滝の里 32



8. 中国人殉難烈士慰霊塔

38

9. あしお四方山話 2 (足尾町の住民)

42

10. あしお四方山話 3 (製錬所)

56

11. 松木村

62

あとがき：足尾を語る生沼勤氏

75

あとがきによせて

81

編集後記

83

## まえがき

### 《足尾銅山の歴史》

栃木県日光市足尾町は、栃木県の西部に位置する山間の町である。古くから人が住んでいた記録が残っており、江戸時代には銅を産出していた。

足尾銅山が鉱山として盛隆を極めたのは、明治から大正の時期である。一八八四（明治一七）年には、足尾銅山は日本で最大の産銅量を誇る銅山となり、一九一六（大正五）年頃には最大産銅量を記録した。足尾町の人口も多い時には三万人、四万人ともいわれ、栃木県内でも宇都宮市に次ぐ人口の多い賑やかな町であった。

しかし、足尾銅山が銅を産出すればするほど、銅山の起源とする様々な公害が発生した。

銅の製錬の際に排出される亜硫酸ガスは銅山周辺の山林が裸地となる原因の一つになった。その上農作物も枯らし、生活がままならなくなった住民はその土地を離れていった。一九〇三（明治三六）年に、足尾銅山より渡良瀬川上流に位置していた松木村が廃村となった。

鉱物に含まれる有害物つまり鉱毒は、採鉱の際に滲出する水に含まれて渡良瀬川へ流出した。ときに多量の雨が降ると、渡良瀬川下流域では洪水が発生し、鉱毒水が農産物などを枯らした。鉱毒水の被害を受けた住民らは足尾銅山鉱業停止請願運動を起こし、警察と幾度となく衝突、裁判となった。国や栃木県はこの洪水対策という名目で渡良瀬川下流の遊水地化を進めた。その結果、谷中村の住民は強制撤去させられ、一九〇七（明治四〇）年、少数の村人を残して廃村となった。これら被害住民による一連の運動が「足尾銅山鉱毒事件」である。

足尾銅山は戦前の日本の近代化を支えたばかりでなく、足尾町住民の生活上に貢献した。その一方で、日本の「公害の原点」といわれる負の面がクローズアップされる歴史を持っている。

足尾銅山は、一九七三（昭和四八）年に閉山となった。足尾町の人口減少は加速し、二〇〇六（平成一八）年三月に日光市と合併。現在の人口は一六〇〇〇人強（二〇二一年現在）となり、過疎の問題も深刻を増している。

## 《現在の足尾》

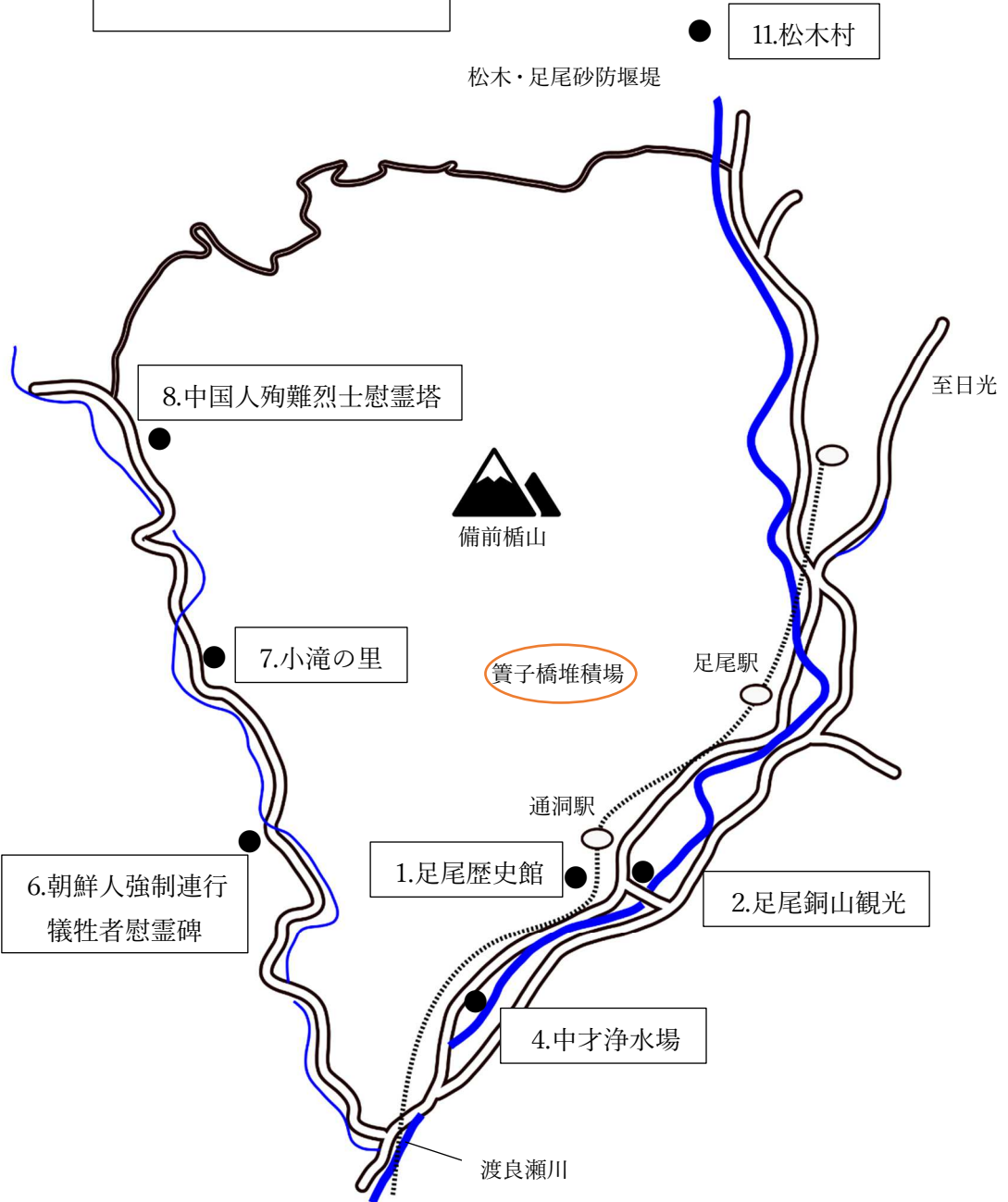
足尾銅山閉山後、足尾町が急速に過疎化する中で、行政や住民らは足尾町の将来を見据えて様々な活動をしている。一九八〇（昭和五十五）年、足尾町は足尾銅山観光を開設し、坑内の様子を観光として体験できるようにした。一九九六（平成八）年にはNPO法人足尾に緑を育てる会が発足し、煙害で荒廃した地域を中心に植樹を続けている。この植樹活動には、環境学習の一環として多数の教育機関等が参加している。また、二〇〇五（平成十七）年には、NPO法人足尾歴史館が足尾町住民の有志によって設立され、足尾の歴史全般を伝えている（二〇一九（平成三十一）年四月に古河機械金属㈱に移管し古河足尾歴史館となった）。そのほか町内には数多くの住民主導の団体が活動し、町内外に情報を発信している。環境問題を学習する場合、銅山のある足尾は、施設見学や資料収集の上で好条件が揃っている場所である。

## 《生沼勤氏と本書について》

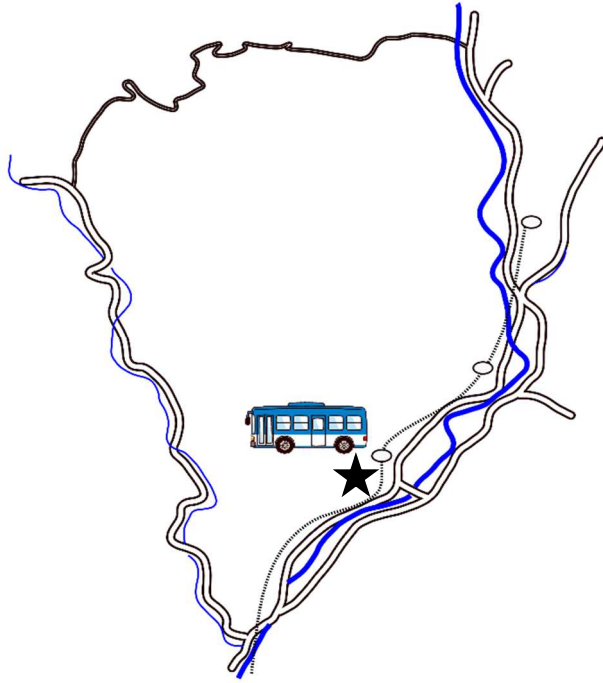
宇都宮大学国際学部 環境と国際協力研究室（高橋若

菜教授）では、環境破壊や犠牲をもたらす社会的構造を実感的に学ぶことを目的とし、二〇一三（平成二五）年から足尾・渡良瀬河流域のフィールドスタディを実施してきた（筆者は二〇一五年から研究室所属者として参加した）。二〇二五（平成二七）年より、足尾に緑を育てる会の紹介で、足尾町在住の生沼勤氏に足尾のガイドをお願いしている。生沼氏は足尾町出身ではないことから、足尾に対して独特な視点と考察を持っている。その案内を文字にすることは、今後の環境学習の上でも貴重な資料となり得ると考えた。こうして二〇一八（平成三〇）年、生沼氏のご協力を得て本書を制作することとなった。本書の内容は、元々が語り言葉のため、読み易いよう多少の修正を加えた。さらに編集の段階で、生沼氏から詳細な補足説明の提供があり、各頁の上段は語り、下段および文末にはその補足説明を記した。また、フィールドスタディや足尾を訪問した際に句坂が撮影した写真も掲載した。目次は、フィールドスタディでのバスの訪問順になっている。生沼氏のガイドを追体験し、足尾の過去と現在を知ることができるだろう。

# 足尾の町と訪問先



# 1. 足尾町の堆積場（足尾歴史館）



足尾歴史館は、二〇〇五（平成一七）年に「楽迎員協会・足尾歴史館」として発足し、二〇〇七（平成一九）年に「NPO法人・足尾歴史館」となった。二〇一九（平成三一）年四月に、古河機械金属(株)に移管、運営されている。





後方の茶色の石が磨石（2017年6月17日）



ガイドをする生沼氏（2018年5月26日）

## 足尾町の堆積場

ここは（足尾歴史館前）小規模な堆積場でした。岩石をよく見ると銅分を多少含んでいるのが分かります。選鉱をした後、廃石はここにも捨てられたのでしょう。製煉をしても銅分が少なく採算が合わないので捨ててしまいます。鉱毒が残っている影響があるかもしれませんが、今でも草が生えることが少ないです。しかし、人体に有毒だと聞いたことはありません。廃石もそうですが、スライムや鉱泥から出てくる有毒物質の毒性は弱いと思われます。

この堆積場は、上空から見るとわかりますがかなり広い堆積場だったところで、今はグラウンドになっています。以前は野球などが盛んでした。今も時々使用されています。足尾町には、大規模な堆積場が一四か所あります。一番規模が大きい堆積場は原堆積場ですが今は稼働していません。役場あたりから見えるのが簗子橋堆積場で、ただ一つ今でも稼働している堆積場です。

足尾歴史館前の堆積場という言葉は不適切かもしれない。確かに廃石は捨てている。

堆積場に捨てられた廃棄物には以下のものがある。

- ・ 坑内廃石（捨石）
- ・ 廃泥スライム（選鉱工程で出るもの）
- ・ カラミ（製錬工程で出るもの）
- ・ 泥流（沈殿地にたまった泥）

足尾にはいたるところで坑内廃石（捨石）⇨含有している銅分が少なく選鉱・製錬の対象とならない鉱石が捨ててある場所が見られる。

「中央グラウンド」「選鉱グラウンド」「野球場」と言われている。

### 原堆積場

面積… 281, 543 m<sup>2</sup>

堆積量… 1, 583, 528 m<sup>3</sup>

### 松木堆積場

面積… 208, 000 m<sup>2</sup>

堆積量… 1, 822, 214 m<sup>3</sup>

面積は原堆積場が一番大きい規模。

堆積量は松木堆積場が一番大きい規模。

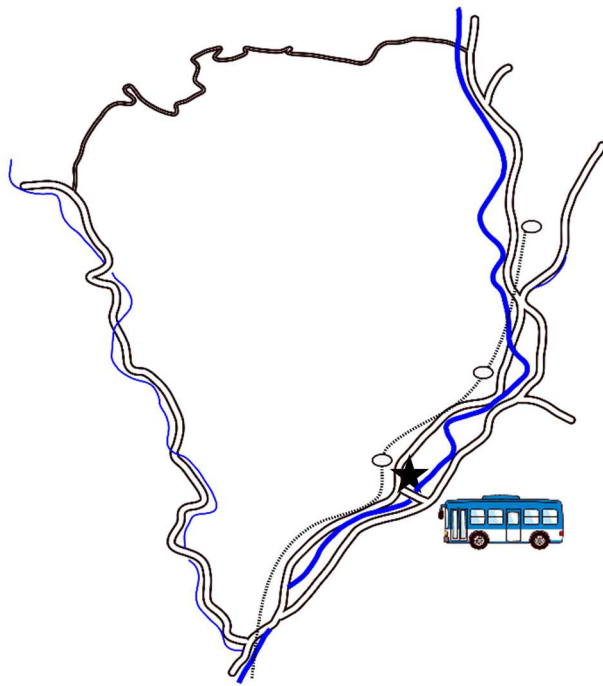


銅山観光入口 (2020年9月22日)



通洞坑内へ入っていくトロッコ(2017年6月17日)

## 2. 足尾銅山観光



足尾銅山観光に入場するとすぐにトロツコ列車に乗り、暗い坑内に入っていく。

このトロツコが入っていく坑口は、通洞坑（つうどうこう）という。一八八五（明治一八）年に開鑿が始まり一九七三（昭和四八）年の閉山まで利用された、足尾銅山にとって重要な坑口の一つであった。

足尾銅山観光の所在地は日光市足尾町通洞、現在でも坑口の名称が地名として使われている。

## 足尾銅山観光

涼しいですね。鉱山は地下三〇〇メートルくらいまで掘ったのですが、地下に行くとは灼熱らしいです。それで温泉が出たのです。昔は火山だったから銅ができたんです。

朝鮮人の多くが、一番技術がいらず賃金の安い仕事をやりました。掘るのにも支柱をやるのにも技術がいりません。鉱山では水をいかに吸い取るかというのが重要な問題で、江戸時代の佐渡の金山では無宿人などが水介人（ミズカイニン）というのをやりました。

私はカッサを植林によく使うのですが、先が尖っていて独特のクワです。鉱山では石を集めるために使います。

坑内の役割によって賃金は違います。技術のいらない仕事の雑夫というのとは一番賃金が低く、その仕事についていた朝鮮人には三円くらいの賃金でしたが、支柱夫には十円くらいと、かなり違いがありました。

\*負夫（オイフ）

負夫は江戸から明治時代の仕事と考えられる。背中に鉱石を背負って運んだ仕事。朝鮮人労働者を使用した太平洋戦争時にはこの仕事はなかったと思う。

\*カッサ（合砂）

小型の鍬。硬きものをよするに用ふ。

〔大辞典〕平凡社

鉱石を集める作業などで坑内作業に使用されたようである。

明確にどの位の賃金であったかわからない。

一九四三（昭和一八）年の足尾銅山労働者の平均日収は進鑿夫が七、〇円、内車夫が四、五円。朝鮮人の平均賃金は日本人労働者の進鑿夫で五六%、内車夫で七四%。大変な格差。低賃金。それも満足に支払われなかった。

〔足尾銅山朝鮮人強制運行と戦後処理〕古庄正、

創史社）



坑道を掘るといのは技術があるので賃金は高いです。江戸時代は「たぬき掘り」といって、試しに狭いところを掘るといった仕事でした。真っ暗で、松明のような道具はあったようですが、怖かったですよね。

足尾の場合は小規模な落盤はあったようですが、落盤は少なかったです。ガス爆発もありませんでした。タバコが吸えたということは、ガスが少なかったということです。

滝みたいに水が流れてるところもありました。

いろいろな機械化が進んで、備前楯山を中心に掘り進めました。上に行くときはエレベーターに乗っていきますが、竪穴に落ちて亡くなるということは結構あったようです。

技術のことはよくわからないのですが、自溶製錬というのが煙害を防ぐために作られたもののようにです。ガスの発生は「皆無」という言葉を使いますが、皆無ではなかったです。しかし、非常に煙害がなくなっただけというわけではないで、そこから大々の植林が始まりました。

江戸時代の坑道、坑内がどのようなものであったか、私（生沼）の手元にそれを描いた文献がなく、不明である。江戸時代の坑道坑内作業がどのようなものであったか、それを描いた文献や書物があれば是非見たいと思う。探せばあるのではないかなと思う。

「たぬき掘り」という言葉は鉱山独特の言葉であるらしい。人間がようやく入れる位の坑道を掘って、鉱石を採掘したらしい。その穴が、狸穴（狸は自分だけ入れる穴しか掘らないという）に似ているのでたぬき掘りといった。

煙害は「皆無」ではなく、非常に少なくなったが、有害な煙は排出された。とくに製煉所の生産量が多い時には多く排出されたようだ。

地下で落盤事故が起きて山鳴りというすごい音がしたそうです。それも閉山の理由になりました。かなり地下まで掘ったのですが、最終的には温泉が出ます。かじか荘の温泉の湯はこの湯ではないと思います。はじめはこの温泉を使っていたと思いますが、足尾町で別に掘ってそれを使っていると思います。そのくらい熱いのです。

鉱脈が枯渇したということになっていますが、外国の銅が入ってきて採算に合わなくなったことと、熱が非常に危険ということも閉山の理由になりました。もう一つは源五郎沢が決壊したのをきっかけに、毛里田地区というところで損害賠償訴訟が起こったことも理由でした。そのころ、古河鉱業の発表では毎年一億円くらいの赤字で採算が合わない状態だったということでした。全然鉱石が取れなくなったというわけではなく、製錬は残して採鉱は止めて閉山したということです。外国の露天掘りにはかなわないです。

閉山時には、地下数百メートルまで掘るようになり、採掘箇所が深部移行に伴い採掘の環境条件は悪化し、さらに盤圧の増加による岩盤の軟弱化、山はねの頻発等保安上最も憂慮すべき事態に立ち至っている。落盤事故の危険性が多くなってきたわけである。

地下数百メートル温度は四二度もあるとか。空気も悪い。大変な労働だったようだ。

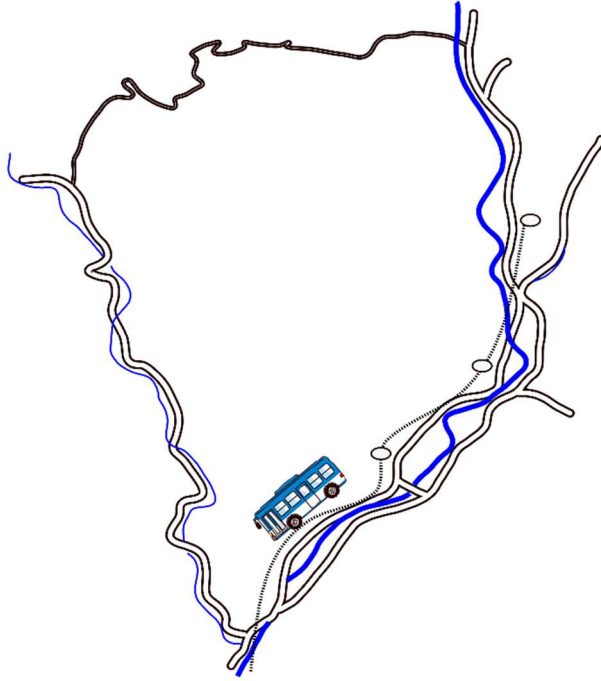
閉山前の一九七二（昭和四七）年には、974トンの産銅量がありました。ちなみに江戸時代の最盛期で1,500トン位でした。

※一九七二（昭和四七）年

製錬所の粗銅量2,400トン（月産）

足尾銅山によるものは300トン（月産）

### 3. あしお四方山話1（中才へ向かう道中）



足尾銅山観光から中才浄水場まで五分ほどであるが、その間にも銅山にかかわる施設が点在している。今でも稼働しているという通洞変電所、巨大な建造物が残る通洞選鉱所。いずれも非公開ではあるが、車窓から見ることができる。



銅山観光前の駐車場から秋の山を眺める（2018年11月17日）



現在も稼働している通洞変電所（2017年6月17日）

あしお四方山誌 1 (中才へ向かう道中)

銅山史の村上さん(村上安正さん)は非常に詳しく書いているけど、朝鮮人問題については古庄正さん。あくまでも村上さんの場合は会社側にたっていると、駒澤大学の古庄正さんは批判しています。

古庄さんも、銀山平に朝鮮人の住宅があったというのは間違いです。小滝にははっきりとありました。小滝から銀山平の間にもありました。小滝にはガソリンカーが走っていて、定時制の下校時間には走ってなかったの生徒は歩いたということを書きました。猪瀬建造さんは朝鮮人収容所という言葉を使いますが、足尾の人にとっては馴染みがなくて朝鮮人長屋といます。中国人収容所というのはありました。古河は社宅を建てていましたが、飯場では建てていない。そこに住まわせて雇用関係は飯場が中間的な役割をしていたようです。

収容所のような朝鮮人を監視している人はいなかったようです。逃亡者が八〇〇人といわれていますが、監視体制がなかったということで、逃げる気になったら逃げられたのではないのでしょうか。逃亡という言葉があてはまるかということもわかりませんが、無断退職も逃亡の扱いだったかもしれません。

朝鮮人の書いた手記、中国人が書いた手記というのは読んだことがないです。証言集はたくさんあります。鉾毒の予防工事(一八九七年)で、費用が百万円というの確かだと思いますが、今のお金でどういうふうに換算するかわかりませんが、かなり膨大なお金を使って工事をしました。そのために足尾の町民も総出で出たという話もあって、木盃を町民に配ったということでした。

印象的だったのは、閉山するとき(一九七三年)の町民大会で配られた木盃を従業員がかかげて、



「我々はこんなに努力したのになぜ古河は閉山するの  
か！」と言ったのが印象的でした。

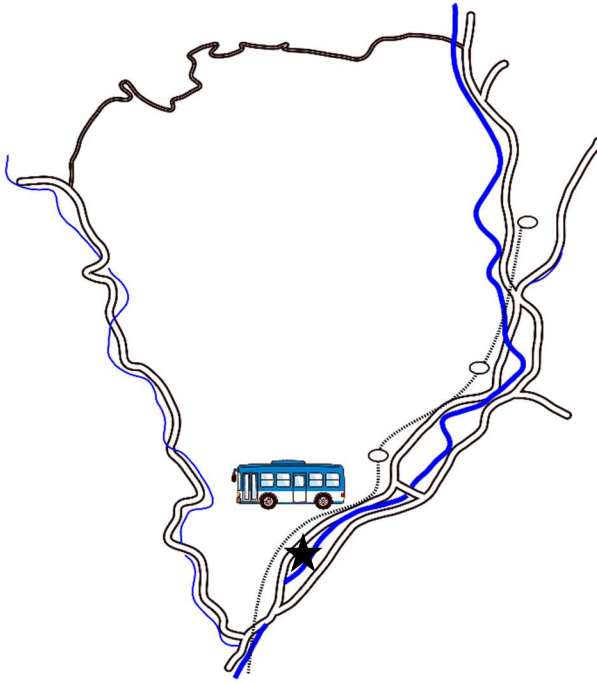
右の建物が選鉱所で、鉱石が運ばれて銅分を抽出し  
てそれを製錬所に運んでいました。

赤い屋根の建物がありますが、あれが銅山長屋で、  
今は町民住宅になっていて今も住んでいます。昔は屋  
根はトタン葺きの黒い屋根でしたが今はカラーの屋根  
に変えられています。四棟に戸割をされて住んでいま  
した。



廃屋となった町民住宅(元社宅)(2018年9月23日)

## 4. 中才浄水場

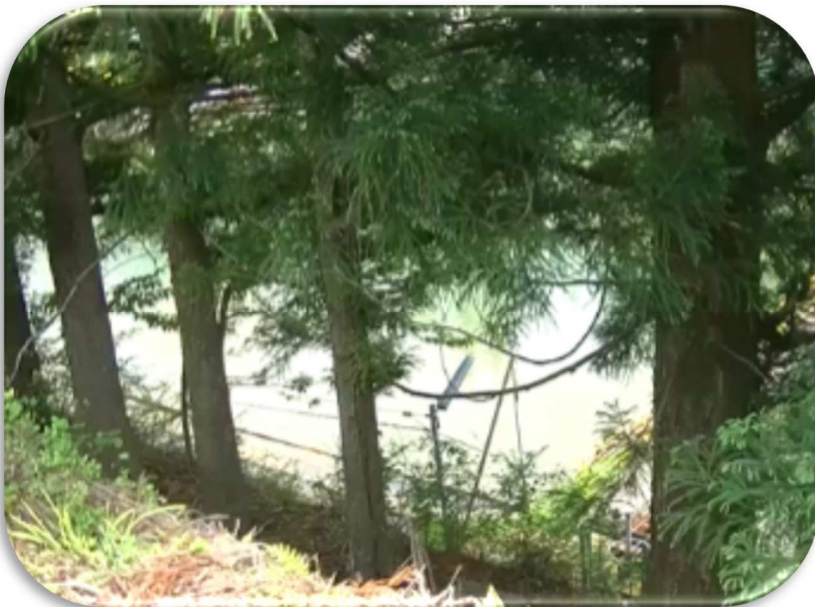


中才浄水場の貯水池を木々の間から見てみると、水が茶色に濁っている。臭いは感じない。音もしない。

この鉱毒を含む汚水は、ほぼ永遠に銅山から排出されるため、浄水処理も同様に続くことになる。



木々の隙間から見える貯水池。水は茶色に濁っている。  
(2018年5月26日)



貯水池と道路の間に木々が立つ。(2018年5月26日)

## 中才浄水場

日本みたい狭いところに、鉾山から出る廃棄物をいかに処理するか大きな問題です。どこに処理場を作っていくかというのが問題になります。この水もかなり気を使っているのですが、大洪水が起こるとこれを垂れ流したということがありました。予防工事が行われても、鉾毒事件は起こっているのですが、大雨が降って洪水になったときにおこります。確かに気を使っていますが、完ぺきだとは言えないでしょう。

今稼働しているのは、中才浄水場と簀子橋堆積場ですが、沈殿池は全部埋め立てられたので面影はなくなっていました。僕が来た昭和三九年くらいは遠下などの大きな沈殿池が残っていて、初めて見たときには、木が一本も生えていなくて、硫酸銅と考えられる青緑色の水とドロドロのスライムが溜めてあってびっくりしました。

一九五八（昭和三三）年の源五郎沢堆積場の決壊に伴う群馬県毛利田地区を中心とする鉾毒事件が起こった。

鉾毒事件について、大正、昭和の時代においても絶滅したとは思えないが、その事について、まとめて書いた文献、論文等があれば拝読したい。

『金属産業の技術と公害』（畑明郎・アグネ技術センター）（二六一頁）の記述「また、足尾銅山の鉾毒予防施設の不備から、突然鉾毒が流下してくることもしばしばあった。被害が甚大であった年は一九二九（昭和四）年、一九三四（昭和九）年、一九三五（昭和一〇）年、一九三九（昭和一四）年であった。特に一九三四（昭和九）年の鉾毒流下事件の場合は、古河鉾業が選鉾処理施設の能力以上の操業を続けたために廃石と鉾滓の捨て場に困り、渡良瀬川に故意に流したのが原因であった。

\* 沈殿池（沈殿場）跡には、古河鉾業足尾陶管工場、足尾窯業、足尾ポット、藤本工業の工場が建設された。（「足尾ところどころ」より）

《補足説明》

この中才浄水場は一八九七(明治三〇)年の鉍毒予  
防工事命令により建設された施設の一つである。完  
きとはいえず、大洪水が起こると故意に鉍毒水を垂  
流したと聞いたことがある。

鉍山を開発するにあたって、製錬所で粗銅になるま  
でに大量の廃棄物が出る。その廃棄物が鉍毒被害をも  
たらした。鉍毒被害を防ぐために、堆積場・浄水場・  
沈殿池が造られた。(他に煙害がある川足尾地区)。し  
かし、坑内・選鉍場・製錬所・堆積場などからの排水  
の処理も問題となる。

堆積場、浄水場、沈殿池に捨てられる廃棄物は以下  
のものである。語句について、いろいろ使われている  
ので、私(生沼)には、正確な事はわからない。

○坑内から出る廃棄物

- ・ 廃石 || ズリ || 捨石      ↓      堆積場
- ・ 坑内水                      ↓      浄水場

○選鉍場から出る廃棄物

- ・ サンド                      ↓      堆積場
- ・ スライム || 廃泥            ↓      堆積場
- ・ 選鉍場からの廃水           ↓      浄水場

○製錬所から出る廃棄物

- ・ 鉍滓(こうさい) || カラミ   ↓      堆積場
- ・ 製錬所からの廃水           ↓      浄水場

○堆積場から出る廃棄物

- ・ 浸透水                      ↓      浄水場

○浄水場から出る廃棄物

- ・ 坑内水(坑内からの廃水。堆積場からの浸透水)

- ↓      簀子橋堆積場
- ↓      簀子橋堆積場
- ↓      簀子橋堆積場

※カラミ

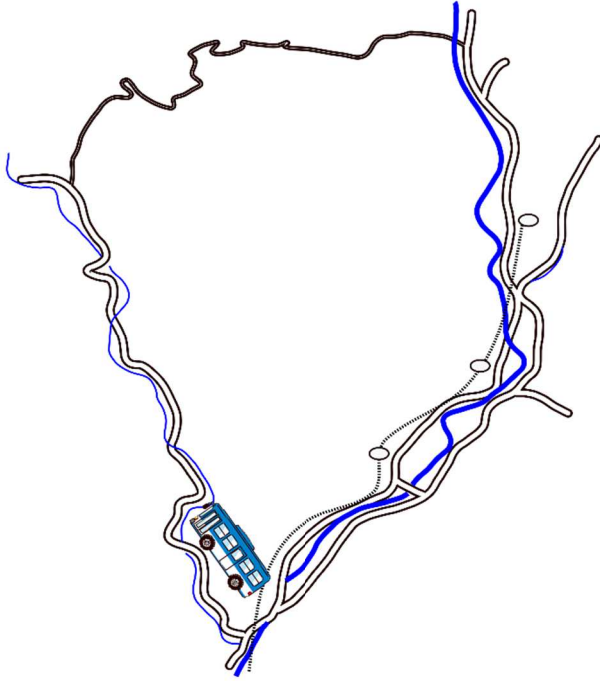
鉍石など溶かして精練するとき生ずるかす。かなくそ。

(「国語大事典小学館」)

鉍石を溶錬する際に生ずる滓(かす)。一般に珪酸塩  
よりなる。スラグ。(「広辞苑」岩波書店)



## 5. 中才から小滝へ



渡良瀬川沿いの国道一二二号線を切幹(ぎりみき)で右折すると県道二九三号線に入り小滝へ向かう。この県道は庚申山公園線ともいう。

江戸時代、庚申山(こうしんざん)山頂にある庚申神社詣が盛んであった。県道入口には巨大な「庚申山」碑や猿の石碑なども置かれている。この道は、小滝坑へ通じる道であるとともに信仰の道でもある。



県道 293 号線入口に建つ「庚申山」碑。(2020 年 9 月 22 日)



日光市指定史跡の旧小滝橋。橋の向こう側に小滝坑がある。  
(2019 年 12 月 13 日)

## 中才から小滝へ

渡良瀬川の向こうにあるのが砂畑で、ここには朝鮮人も住んで、白人の捕虜収容所もありました。白人の収容所は砂畑と野路又にありました。

遠下の大きな沈殿池は埋め立てられて、一部が住宅地になっています。被害はないです。びっくりしたのは、通洞社宅が壊されて個人の住宅が建つとき、下にカラミが出てくるのです。だから足尾の場合、土地造成に廃石が多く使われたのだと思います。上に廃石を利用して平らな土地を作っていたということです。

高原木というところも堆積場だったのですが、朝鮮人もたくさん住んでいたし、煙害もひどかったということです。大正時代には一万五千トンの銅が出るわけですが、銅を含んでいる割合は極少量で、ほとんどが捨てられるわけです。それをどこに捨てるかということが問題になります。廃石に含まれている鉱毒が流れ出て鉱毒事件が起こるからです。

(小滝を走行中)

ここは軌道だったので、ガソリンカーの軌道車が走っていました

通洞地区において、社宅を建てた時、どのような土地造成が行われたかはわからない。

\*通洞地区

明治二〇年ころ 五〇〜六〇戸

明治四〇年ころ 最盛期の戸数

昭和三六年 一五九二人

三一六戸(足尾最大の社宅街)

私が見たのはかなり前であり、カラミが捨ててあったかどうか、確実なことは言えない。もしも、あったとしてもごく少量である。

鉱毒の大きな原因は、廃泥、スライム、坑内水、選鉱廃水、製錬廃水、カラミ、廃石などで、廃石のみではない。

鉱毒の原因は、銅、砒素、銻亜鉛、カドミウム、アチモン等による複合汚染。(畑明郎「金属産業の技術と公害」アグネ技術センター、一五六頁)

た。よく脱線したらしいですが、そうすると乗客が降りて持ち上げ  
て軌道に戻したということですが、川に落ちたということは聞きま  
せん。客車のことを定刻通りにくるから「テイジ」といいます。今  
でもこの道をトロ道といいますが、これは軌道車であるガソリン車  
が走っていた道ということです。

ここを開放して軌道車を走らせたら、もっと観光地になると思いま  
す。

教育は熱心だったと思います。

足尾では社宅以外の住まいを町部（チョウブ）いいます。ここは町  
部のところですよ。

足尾には小規模ですが一万キロワットの発電所を原というところ  
に作りました。小滝の庚申川にあるダムはそのための貯水ダムで  
す。

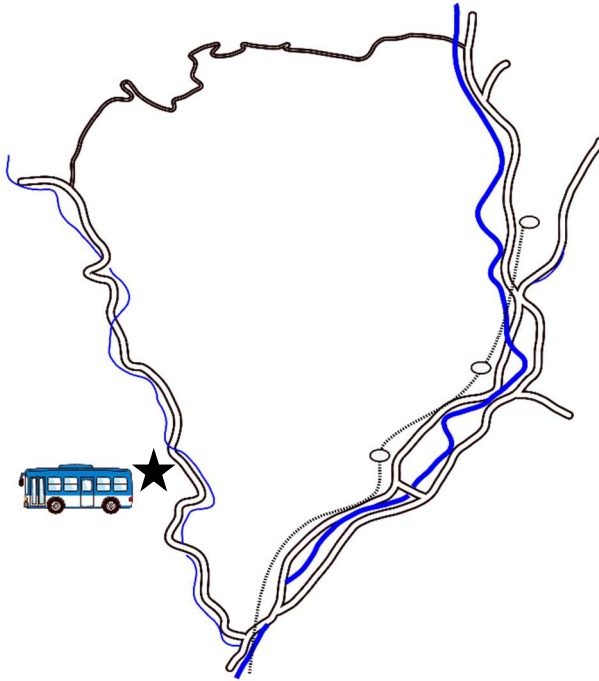
トロ道⇨トロッコと軌道車（ガソリンカー）をこっ  
ちやにしたのか？

発電所⇨県営足尾発電所

一九八五（昭和六〇）年一〇月に完成

（一一月に「記念起動式」を挙行）

## 6. 朝鮮人強制連行犠牲者慰霊碑



朝鮮人強制連行犠牲者慰霊碑のある場所は、専念寺説教所跡である（朝鮮新報DIGITALSINBO 二〇一五年八月一日版より）。専念寺本寺は、足尾町中心地区の松原にある。

現在の慰霊碑や卒塔婆は木製であり、仮墓標ということだ。「足尾朝鮮人強制連行犠牲者追悼式」は行われているものの、正式な慰霊碑は未だ建立されていない。



慰霊碑（2019年12月13日）



犠牲者の名前が書かれている。創氏改名による  
日本人名である。（2018年5月26日）



## 朝鮮人強制連行犠牲者慰霊碑

足尾で働けば高賃金で仕事があるよ、家族を連れて行っても生活ができると言われて日本に来た朝鮮人も、若干はいたようです。しかし、二六一四名のほとんどは強制連行です。官斡旋と徴用というのがありますが、強制連行というのは、所謂労務者狩りをやりません。これは証言集をみると、ほとんど労務者狩りです。つまり、朝鮮で働いていたり遊んでいたときに、捕まって殴られたりして収容所みたいなどころに入れられて、汽車に乗せられて日本にやってきたのです。日本全体でどのくらいの朝鮮人が来たのかは、数が分かっています。ある人は百万人とも、ある人は数十万人と言われていきます。中国人の場合は、四万人という数字があります。だから、すごい人数の朝鮮人が日本に来たのです。

なぜ連れてこられたのかというと、日本の労働力の不足です。足尾の場合は、岸信介という今の安倍首相の祖父ですが、この人が商工大臣だった時に足尾にきて「一足す一は二と考えるな、一足す一は・・・」という有名な言葉のように、働け働け増産に努めろ、と言いました。天皇は来ていませんが、天皇の侍従が来て一生懸命

岸信介  
足尾に来山の時期は、重要鉱物非常増産強調期間だった。岸は東條内閣の商工大臣。

一九四三(昭和一八)年八月三日に足尾にくる。「全山一心に火の玉の一团となり、増産の実を貰いたい」東條総理が、口癖のように国民を激励する言葉に、不可能を可能にする「二十三〇〇にせよ」という言葉がある。

「二十三〇〇」の精神力という。

一九四二(昭和一七)年一月二二日、半島労務者合同訓練並運動会を開催。

・三百十余名参加(昭和一七年には三〇〇名以上の朝鮮人労務者がいた)

・優勝団体

本山高原木協和寮・通洞砂畑協和寮・小滝銀山協和寮

\*ここから朝鮮人労務者が高原木・砂畑・小滝に住んでいた事がわかる。

\*寮がありそこに住んでいた事がわかる。

・個人優勝 金田小軍(金村元福 高原時燦 松本奉根)

\*創氏改名の様子がわかる。

参考文献 『足尾銅山』第七号(足尾鉱業所の社内機関紙)

働くように激励しています。

一方で、足尾からも何百人という人が兵隊に採られていきました。だから労働者不足です。でも掘らなくてはならないので朝鮮人や中国人、東南アジア戦線で捕虜になったアメリカ人やオーストラリア人の白人の捕虜の四〇〇人くらいを砂畑や野路又にとりこめて働かせました。あとは、実用学校の生徒だけでなく中学生も働きました。栃木高校(中学校)からも勤労働員がかかり足尾にきました。

朝鮮人には給料を払うことになっていました。これは規定で、足尾の労働者の七〇%から八〇%の賃金が払われることになっていました。ところが、賃金がちゃんと払われたという本は一冊もみつかりません。だいたい五円や、たばこや下着を買うくらいのお金は与えられたらしいです。物を買うには三養会(足尾銅山観光駐車場横の建物)で物を買えましたが、ツケで買って後で給料から引かれています。

私は足尾にきて現金が無くても暮らせることに驚きました。学校の教師は信用がありましたから、大福帳に一月分を書き足していききました。おかげで結婚するときにはマイナスになりましたけど。

#### 徴用工の問題

韓国の最高裁判所が二〇一八(平成三〇)年一〇月に元徴用工に対して日本の会社(旧新日本製鉄)に対して賠償金を支払う判決を言い渡したことが、マスコミの話題になっている。

マスコミは、朝鮮人強制連行労働者という言葉は一切使っていないようだ。朝鮮人強制連行労働者という言葉は、一般になじみのない言葉、また刺激的な言葉なのか。

政府や会社は、元徴用工の請求権問題は一九六五(昭和四〇)年の日韓請求権協定で解決済みだと主張。それに対して判決は個人的請求権が消滅していないと認定。更に「原告の損害賠償権は、朝鮮半島に対する不法な植民地支配および侵略戦争遂行と直結した日本企業の反人道的な不法行為を前提とする慰謝料請求権」だと判断し、請求権協定の適用対象とは別の性格の請求権だと指摘した。

日本の最高裁では二〇〇三(平成一五)年に原告側が敗訴している。

(「赤旗」による)



賃金が満足に払われなかったから、逃亡者が八〇〇人もいました。本によくでています。朝鮮人収容所というのは足尾ではピンとこないです。それは、八〇〇人も逃亡したということはある程度監視は緩かったということです。家族持ちもいて子どもも小学校に通っていますから、収容所とはいえないです。

戦後、朝鮮人の連合の団体ができて、その栃木県の団体の足尾支部が古河と団交しました。一応、妥結したということです。給料の未払い分や退職金、強要されていた貯金分、負傷者への補償、厚生年金（実態はわかりません）は払われなかったようです。当時の大川副所長が朝鮮団体に慰謝料として二十万くらいを払って妥結したとしました。しかし、妥結したのはとても遅くて、一二月ごろだったため、そのころほとんどの朝鮮人は朝鮮へ帰っているのです。だから払われなかった人もいるらしいです。朝鮮へ帰るためのお金は古河が引率しながら出したようです。国、故郷を思う気持ちは強いですね。

食料はあまりなくていつも腹ペコ、死ぬ間際くらいの食料が与えられてギリギリの生活、最低限の生活の保障はあったようです。

足尾の場合、戦後朝鮮人が残ったという話は聞きません。だから妥結の後まで残っていた人はほとんどいなかったようです。未払い

逃亡の原因として、賃金だけではなく、過酷な労働現場などさまざまな事が考えられる。

一九六五（昭和四〇）年の日韓基本条約

一九六五（昭和四〇）年の日韓請求権協定

一九一〇（明治四三）年の韓国併合以来の朝鮮支配、一九四一（昭和一六）年に始まる太平洋

戦争による強制連行労働者（徴用工）の問題、慰安婦の問題が含まれる。韓国政府が認定した元徴用工は、約二二万六千人。

元徴用工による訴訟は、日本企業八〇社を相手に係争中。この八〇社に古河は含まれているのか不明。足尾銅山だけで、二六一四人といわれる。他の古河関連事業体にも多分いたのではないのか。古河はどのように考えているのか。

マスコミは朝鮮人強制連行労働者という言葉を使っていないようだ。意図的に避けているのか。

徴用工には賃金の支払いがあったが、支払われるのはごくわずかで、未払いが多かった。この金の請求権は協定で解決済という。韓国から多少の金は個人に支払われたようだが、いかほどか。

賃金は残ってしまいました。

その後の日韓基本条約では、戦後補償はしないという条項があるらしいです。それで終わりです。慰安婦の問題は大きな問題になっていますが、朝鮮人の強制連行問題も慰安婦の問題と同等に扱われないのが不思議です。強制連行問題も同じように悲惨な問題です。

名簿をみると、七三名。創氏改名して日本人の名前になっています。笑い話ですが、天皇の名前を使って怒られたなんていうこともあったそうです。この中には、坑内事故で亡くなった人もいますが、しっかりと七三名の名簿が残っているのです。○歳とか二歳三歳の子どもの名前も残っています。

骨はどうなったかわかりませんが、寺で葬式はやっています。名簿にはどこの寺で葬式をやったというのも記されています。この寺の住職は存命です。専念寺という寺で、ご住職の字だということですね。

朝鮮人の問題はしっかりと解決されるべきではないでしょうか。この慰霊碑も、日の当たらないこの場所でもいいのかわかりませんが、もっと立派なものが何年か後に建てられればよいと思います。しかし、日韓条約や北朝鮮との問題もあり進んでいません。

足尾でも、会社との交渉が行われたが、満足な解決には至らなかったようである。一刻も早く、故郷、朝鮮に帰りたかったであろう。

足尾には、かなりの朝鮮人がいたわけだが、どんな生活をしていたのか。虐待されたとか、逃亡の話とかは聞き書きに出てくるが、日常生活に関する聞き書きは読んだことがない。あつたら、読みたいと思う。特に家族持ちの人の話を。学齢の子供は、小学校に通っていたらしい。いじめはあったのか。朝鮮の人たちどのような生活をしていたのか。

日韓基本条約一九六五（昭和四〇）年六月調印。

\*財産請求権の問題



慰霊碑の裏 (2019年12月13日)



無造作に置かれた卒塔婆(2019年12月13日)

毎年慰霊祭は行われています。  
碑には、足尾で犠牲になった同胞たちの遺恨は忘れない、というこ  
とが書かれているそうです。

---

専念寺の住職の字であるかどうかは、私(生沼)  
にはわからない。しかしある資料には、専念寺の  
住職の字と書かれている。

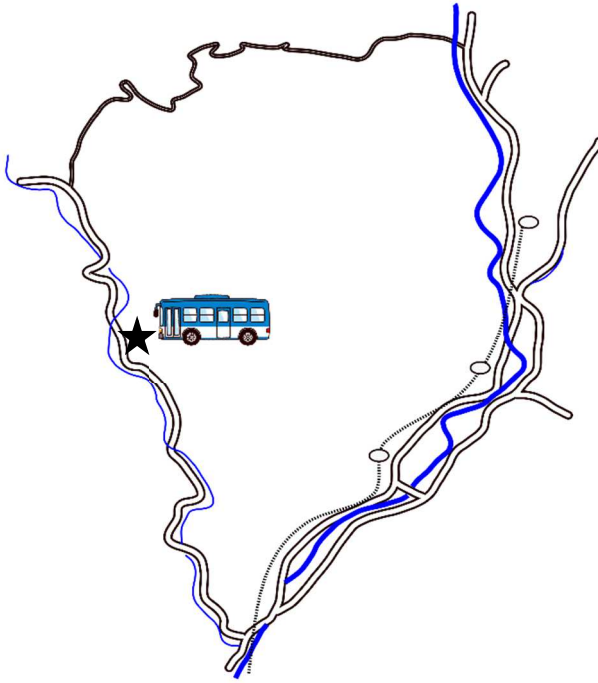


掛水倶楽部内の迎賓館（2018年11月17日）



掛水地区には古河の役宅、福利施設等、重要な建物があつた。（2018年11月17日）

## 7. 小滝の里



小滝にも亜硫酸ガスを排出する製錬所があった。一八九七（明治三十）年の鉱毒予防命令によって製錬が本山製錬所に集約され、小滝製錬所は廃止となった。これによって、小滝ではガスの被害がなくなり、緑が蘇ったといわれる。

小滝の坑口は、一九五四（昭和二九）年の事業合理化によって撤収され、銅山にかかわる施設も次々と廃止、多くの住民は他地区に移った。





「小滝の里」碑。小滝小学校の校歌が刻まれている。  
作曲は山田耕筰。(2019年12月13日)



今は石垣が残るのみ。冬の方が緑は少なく、遺跡  
が見えやすい。(2018年9月23日)

## 小滝の里

これから、小滝、銀山平に向かいます。

道に入ったすぐ右側に庚申山碑があります。この道をまっすぐ行くと、かじか荘に行きます。それから歩きで登山道を登り、多分二時間弱で庚申山の山荘に着きます。秋の紅葉が非常にきれいです。昔、庚申山信仰で栄えたとか。

また、滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」にこの山が登場します。

左側に流れている川が庚申川です。かじか荘一帯は、堆積場ですから、完全にきれいとはいえないかも知れませんが。

人家が数件残っていますが、この右側を少し下ったところに、ここからは見えませんが、宇津野の火薬庫があります。立入禁止で入れません。石造りのがっしりした建物です。銅を採掘するために、大量のダイナマイトが使われた歴史があります。

朝鮮人慰霊碑に行く少し前に、ダムがありますが、これは原にある県営発電所の取水ダムです。発電所は一万キロワットという小規模の発電所ですが、一九八五（昭和六〇）年に起動開始しました。

ここは、花柄、少し行くと文象、色々な商店が軒を並べていたそ

足尾銅山に三つの主要坑口があった。本山、通洞、小滝である。

この坑口を拠点にして、社宅集落が造られた。一九五四（昭和二九）年に小滝が撤去され、閉山（一九七三（昭和四八）年）に伴い、本山、通洞、愛宕下、下砂畑、深沢なども撤去された。同時に、通洞のようになり新しい住宅地になったところもある。また市営住宅に移管された集落もあった（中才、砂畑、南橋）。

うです。小滝は一九五三年（昭和二九）年に、小滝坑が廃止され、関連施設が撤去され、社宅は無くなり、無人となるわけです。それにもない、町部（足尾では社宅でないところを町部という）の商店も移転するわけです。私が足尾の来た昭和三九年は、もう今のよう、何もなただ家が数件残っているだけでした。

小滝坑が出来たのが明治一八（一八八五）年。それ以降、製錬所、選鉱所、発電所などができ、多くの社宅ができ、銅山が経営する病院もありました。最盛期には一万人以上が住んでいたといえます。

銅山の病院、生活用品を購入できる三養会もあり、真面目に働いていれば、衣食住は保証されるわけで、ここだけで生活ができました。町部には郵便局もあり、芝居小屋もあり、色々な商店もありましたし。

小滝坑廃止から六五年。ただ、石垣が残るのみです。社宅跡を歩くと生活の跡が多少見られます。

沢がありますが、文象沢です。この上に、古河が建てた私立の小滝小学校の跡があります。最盛期には千人余の生徒がいたとのことです。

現在、「ここに小滝の里ありき」という碑が建っていますが、ここは、小滝の中心部で、小滝分局など銅山施設があったところです。



明治四〇年には、歴史に残る足尾暴動事件が起りました。不思議と小滝の鉞夫たちはその暴動に参加しませんでした。これは、小滝の特徴を物語っているのではないと思います。この小滝に住んでいた人たちによって、昭和四九年に小滝会が結成され、幾度か会が開かれています。参加者は一〇〇人以上のようです。しかし、その多くの人が高齢化し、会の開催が途切れているとの話を聞いたことがあります。寂しいことです。

小滝会のほかに、昔、材木供給のために、群馬県側に根利山というところがあり、そこに住んで根利山会という組織がありました。が、今、どうなっているでしょうか。

小滝会が結成されたのは、小滝独特の団結、小滝に対する愛郷心があるのでしょうか。また会を結成する人材がいたからでしょうか。

生田龍作さんという小滝の飯場の世話役（昔の飯場頭）がいました。戦後、労働組合の委員長、県会議員などを歴任した人です。また、その人の協力者柳田繁雄さんという人、等々、人材がいたのかもしれません。

生田龍作さんは音楽隊（吹奏楽）や体育活動にも尽力したようです。その娘さんと私は足尾高校で同僚になり、お世話になりました。

小滝がなぜ足尾暴動事件に参加しなかったのか。

(一) 暴動の中心地である本山地区や通洞地区などから遠く離れていること

(二) 時の小滝坑場長が小滝の鉞夫たちの人心をしっかりと掌握していたこと

(三) 飯場頭役の温情や気配り

(四) 小滝を包む温かい人情の絆など

(五) 「至誠会」の組織は本山等が中心であり、小滝にはその勢力が及ばなかったのではないか。

(六) 小学校が小滝小学校一つしかなく小滝人の心をひとつにしたこと。

などなどいろいろな原因が考えられます。

(太田貞祐「足尾銅山 小滝の里」による)

「足尾ニュース」足尾鉞業所の機関紙にこんな文章があります。

「小滝の思い出ということになりますと、なんといっても一番印象に残っているのは明治四〇年二月の暴動の時のことです。その頃は二〇才でしたがあの時恐ろしかったことはいまだに忘れません。その時小滝の坑場長をしておられたのは江刺重樹という方ですが、この人は実地からたたき上

小滝に製錬所があった明治二八（一八九五）年に唐風呂地区（小滝の山向こうの地区）で煙害に対する損害賠償の訴訟を起します。敗訴してしまうのですが。

明治三〇（一八九七）年の予防工事命令のために小滝製錬所は廃止され直利橋製錬所に併合となり、小滝周辺の山は酷い煙害から免れますが、足尾北部（松木など）はますます酷くなるという結果になります。

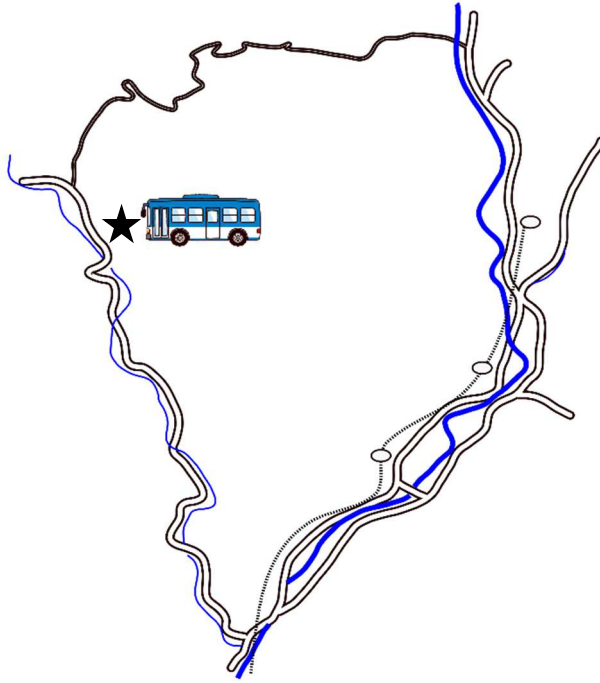
小滝周辺の山々が緑を回復したのは、予防工事のおかげと言えるかもしれませんが。

げられたなかなかの苦労人の人格者で、人望のあった人ですが、この方の統率というか、指導がよかつたせいか、小滝だけはあの暴動に加わらなかつたのです。

しかし火をつけられるとか、おしかけてくるとか、いろいろデマが飛んで大騒ぎでした。家のタンスの裏に乱暴な字で木村と書いてありますが、これは裏山避難した時、あわてて書いたものだそうです。小滝は暴動に加わらなかつたというので、あとで会社からたしか坑夫が五円、雑夫が二・三円の金一封・・・そのころにすれば大した金額でした・・・をいただきました。」

小滝の製錬所によって山林にどれほどの被害が出たのか不明ですが、唐風呂の訴訟は、この小滝製錬所からの煙害と考えます。予防工事の結果、小滝製錬所が解体されるわけですから、小滝や唐風呂などの地域の緑が回復・保持されたのは予防工事のおかげといえるかもしれません。

## 8. 中国人殉難烈士慰霊塔



慰霊塔は、銀山平から階段を上った小高い丘に建っている。この階段の脇に数本の桃の木が植えられている。中国で桃は、不老不死、長寿と幸福の象徴である。

中国人捕虜にとって日本は「桃源郷」ではなかったであろう。巨大な慰霊塔の正面が向いている方向、その彼方に中国がある。



慰霊塔の謂れが刻まれた石碑（2018年5月26日）



巨大な慰霊塔。中国の方向を向いて立つ。（2019年12月13日）

## 中国人殉難烈士慰霊塔

この塔は、昭和四八年、足尾銅山が閉山となった年に建てられました。この年の前年、日中国交回復が成立し、そのことが、この塔を建立することに大きく関係するわけです。

足尾に連れてこられたのが二五七名です。運ばれる途中で衰弱してかなり死んだようです。日本全体では四万人と言われて、そのうち何人かが足尾に連れられてきたわけです。亡くなった人が一〇九名となっていますが、一人だけ後で自殺している人がいます。慰霊塔の裏を見ると、この人は中国人の通訳だったようで、戦後自殺したようです。この一〇九名の中には入っていないのですが、だれかが憐れんのか後で刻まれたのだといわれています。

朝鮮人強制連行と違って捕虜で軍人が多いですが強制連行の人もいます。名簿は、随想舎から猪瀬建造さんが書いている本に書かれています。収容所は川向こうの爺ヶ沢に興亜寮という建物がありそこに収容されていました。軍人の監視人はいなくて、民間人の監督者がいました。

朝鮮人の場合は、朝鮮人の監督が朝鮮人をいじめたと書かれています。

中国人烈士慰霊塔がある一帯は公園になっているが、以前は堆積場だった。堆積場の浸透水の有害性は現在どれほどなのかわからないが、上流は沢釣りの人がかなり入っている。きれいな川である。足尾にある旅館は、この銀山平にある亀村別館とかじか荘だけになった。町中の歴史ある泉屋旅館や一丸旅館が廃業し無くなった。本当に不便になった。

ます。中国人の場合は、ほかの地域の死亡率から見ても死亡率が高いですが、ほとんどが栄養失調でした。

足尾の場合は、炭鉱のようにガス爆発や落盤は少なく、胃腸カタルや大腸カタルのような内臓疾患が多く栄養失調のようでした。

足尾は米が全然取れないので、コメは他から持ってくるので、軍需工場として配給はあっても生きるか死ぬかギリギリの食料が与えられていたのです。タバコも与えられていたようですが、病気で亡くなる方が多かったようです。

慰霊塔を建てるのに、古河がどのくらい関わっているのかはわかりません。足尾が独自に寄付をしているようですが、古河がノータッチだったわけではないと思います。

骨は入っていません。中国に持って行ったのではないでしょう

か。ここも堆積場、小滝坑から出た鉱石を銀山平堆積場で、平らにして製材所になっていました。鉄索が群馬県側にまで行っていて、トンネルを群馬県まで通して材木を運びました。

足尾町では、自治会、役場、管理職員、地区労、町議会が寄付金に協力している。土台の石は、庚申川から中学生が運んだという話である。

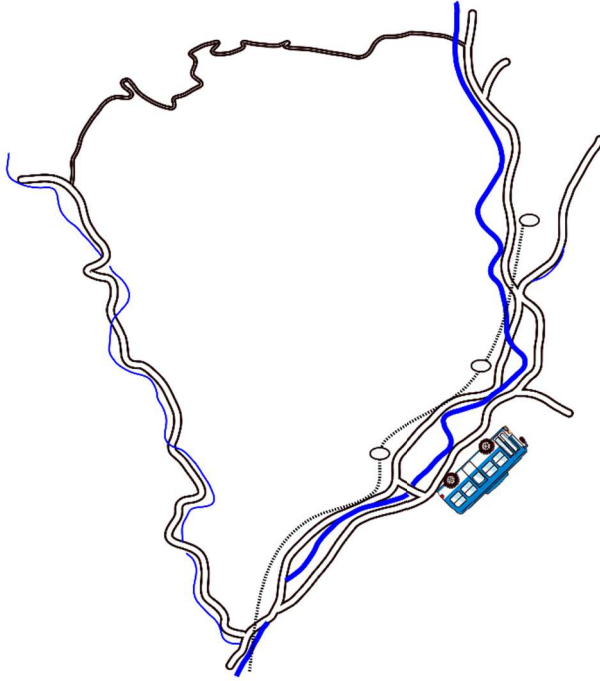
ここはもともと小滝堆積場である。ここは公園になり、かじか荘の建物も建ち、堆積場としてのリストからはずさされているが。

小滝坑から出た廃石を鉄索を使って、ここに運び、堆積場にした。この小滝索道（小滝〜銀山平）には索道隧道が掘られていて、索道にトンネルがあるのは珍しかったようだ。

昔はこの銀山平には大きな製材所があり、材木は群馬県の根利山から鉄索で運ばれていた。一九三九（昭和一四）年に根利林業所は閉鎖された。

\*鉄索は現在の「スキーリフト」のようなもの。

9. あしお四方山話 2 (足尾町の住民)



生沼氏の話は、耳に馴染みやすい。伊勢の出身という割に、関西言葉の特徴は全く聞かれない。

足尾は栃木県に属しているが、さほど栃木訛りは強くない。足尾には方言はないという人もいるほどである。

足尾銅山で働く鉱夫らは北陸、東北出身者が多かった。次第にだれにでも聞き取り易い「足尾訛り」が話されるようになったのかもしれない。





日光市立足尾小学校中学校（2019年12月13日）



龍蔵寺。左の墓碑の塔は、松木村から移設されたもの。  
製錬所方面を向いている。（2018年9月23日）



## あしお四方山話 2 (足尾町の住民)

足尾が日本で有数の銅山であったことは確かです。足尾にはいろいろな問題がありました。労働運動が盛んだったこともいえません。南助松、永岡鶴蔵という指導者がいて大日本労働至誠会を作つて、労働運動としての要求運動をしました。第三回予防工事命令を出した東京鉱山監督署長南挺三が、古河に呼ばれ鉱業所の所長となり労働政策を強化したことも一つの暴動の原因と考えられます。

また、鉱毒予防工事に百万円というかなりのお金を使っているのですから、いろいろ締め付けを強化したようです。

薪は自由に使っていたのが、「坑内より腐朽したる細小の木材を薪に供する為を持ち出したるときは罰金に処す」というように、使えていたのが使えなくなったりと、小さな締め付けがあったようです。

鉱山労働者にはいろんな不満がありました。村上安正さんという足尾研究の第一人者は、出来高払いの間代(ケンダイ)が大きな問題だろうと書いてます。

足尾の「いろいろな問題」とは。殖産興業政策に果たした役割、それに関連して起こった渡良瀬川流域の鉱毒事件、足尾町における煙害問題、日本の先駆けを行く労働運動、銅山の職業病である珪肺(よろけともいう)問題、中国人強制連行の問題、朝鮮人強制連行の問題(徴用工の問題)、等々。一九七三(昭和四八)年二月の閉山、それに関連して、急激な人口減、高齢化、町村合併など。

間代(ケンダイ)

手掘坑夫の作業量(採掘粗銅量)に対する請負単価。すなわち一方当たりの掘進量を出し爆薬所要量をふくむ総合間代(けんだい)として、実際の搬出した粗鉱の重量および粗鉱品位を産出決定し、これに単価を乗じて請負賃金を定めた。

(「鉱山用語集」金属鉱山研究会編 八三、八四頁)

間代は、現場員によって決定されたが、その査定に不公平があったようです。役人（会社の職員）が賄賂なんかをもらって、仕事のやりやすいところに割り当てられたりします。鉱夫の賃金に間代は大きく左右するわけです。賃金に関する問題も暴動の原因だったのではないかと言っています。

労働争議は明治四〇年と大正七年にも中央から麻生なんて人が来て指導して大争議がありました。日本の最も初期のメーデー、労働組合運動が足尾では行われました。

鉱山文学の松田解子さんの本を読んだ方もいるかもしれませんが、鉱山は鉱山の独特な文化を持っています。その中で説明している中国人、朝鮮人の強制労働問題などもあります。

現在は過疎化で、二〇一四人。これが不思議で二〇一四人からなかなか減らないんですけど。いつ二〇〇〇人を割るかなと興味津々で統計を見えています。非常に高齢化が進んでいます。

坑夫の賃金は、一般に出来高給で、その基準は切羽毎に現場員によって決定されたが、その査定に不公平な点のあることが、強く意識されている。（二村一夫著「足尾暴動の史的分析」・東京大学出版会）

その他、暴動の原因として、飯場制度に対する不満、労務政策の締め付けの強化など鉱夫の不満が爆発したわけである。

大きな労働争議はこの「明治四〇年の暴動」と「大正八年の争議」「大正一〇年の争議」だった。この大正時代の争議には、日本の労働運動の指導者である麻生久などが活躍している。また、日本におけるごく初期のメーデーである第二回メーデーを足尾で開くことに成功している。

松田解子さんの代表作は「おりん口伝」であろうか。

伝統のある三養会という古河が経営していた生活協同組合が、閉鎖されたりいろいろ問題があります。だから町村合併。足尾は日本でも有数の面積を持っているらしいですけど、そのほとんどは山間部。基幹産業である銅山がなくなり、予算なんかはかなり厳しいものでした。所謂地方自治体として財政がなりたたないのでしょうか。

他の農村部だと自治体の村会議員が廃止されるということが問題になっていますが、農業のような産業があればいいのですが、足尾の産業は銅山及び銅山関係の企業だったんです。だからそれと全く関係のない企業というのは、ほとんど見られないわけです。双愛病院とかはありますが。自治体として、本当になりたっていないか。昔、三万八千人の人口があったとしても、減っていくというのは鉾山町としての宿命だと思います。僕なんかもう七八歳（平成三十一年一月四日現在）後期高齢者です。夫婦とも車に乗れるからまだいいのですが、これで夫婦ともども車を運転できなくなったら、どうするか、非常に不便になり、日常生活に困ることでしょう。

現在もますます過疎化は進み、現在二〇一八（平成三〇）年九月一日現在の人口は、一九二四人、世帯数は、一二一三世帯である。とうとう二千人を切った。また、非常に高齢化が進んでいる。足尾地区における年齢別人口構成がどのようになっていいるか興味がある。市役所で調べればわかると思う。

古い歴史をもつ三養会という古河が経営していた生活協同組合が現在では閉鎖され、なくなった。三養会は、足尾の住民にとって大きな役割を果たしていた。ますます買物難民になっていくだろう。

二〇〇六（平成一八）年三月、五市町村（今市市・日光市・足尾町・藤原町・栗山村）が合併し、日光市が誕生した。

この新「日光市」は、日本でも有数の面積だと聞いている。ただし、山地面積の割合が多いようだ。足尾町の場合、足尾銅山が閉山となった今は、ほとんど町の財政を維持する基盤がないわけだから、単独自治体として足尾町を維持することは困難であったと思う。合併も仕方がなかったのだと思っている。

インターネットなんて僕が何回やってもどうもものにならないで、今に止めているんですが。インターネット、スマートフォンなど便利なものがあり、あらゆる物がすぐに手に入るようですが、機械が苦手の老人には無理です。生協や引き売りもあります、必要な物をどれほど買うことができるのか。また、今のところは病院や銀行、郵便局などがあります。将来どうなるか。様々な生活基盤をどうするのか、深刻な問題です。

足尾の観光地なんて、一時は三〇万人くらいは銅山観光に来たのですが、今は一〇万人台くらいに落ち込んでいるのかな。ぼくは、秋田県の尾去沢の銅山観光を見たことがあります、すごい規模が違うんですね。だから観光云々と言われた時期があったんですが、それも行き詰まってこの状況です。

古河は、閉山の間際に一〇〇億円を投資するなんて格好いいことをいったけれども、どれほどの投資を足尾に行ったのか。古河は足尾にたくさんの遊休地を持っています。この土地を足尾町にどれほど提供したのか調べないとわかりませんが、銅山観光、通洞の住宅地、足尾支所、かじか荘、キャンプ場などなど、多くの土地を提供していることは確かです。

一九七三（昭和四八）年二月の足尾銅山閉山前後、企業誘致、観光開発道路整備など、産業振興策が計画され、いくつかの企業が誘致された。また、一九七八（昭和五三）年には日足トンネル開通、一九八〇（昭和五五）年には足尾銅山観光がオープンした。しかし、足尾の再生は困難であり、合併やむなしとなった次第である。

現在、誘致された企業の多くは足尾から撤退して無くなり、古河によって造られた鉾泥を利用した「陶管工場」も無くなった。現在あるのは「双愛病院」・「皇海荘（社会福祉施設）」など、数少なくなつた。古河関係では、「足尾さく岩機」「古河キャステック」「古河機械金属足尾事業所」ぐらいだろうか。

一九一四（大正一五）年にあつた三八〇〇〇人ほどの人口が、現在は一九〇〇人ほど。これから人口はますます減少していくのではないか。これも、鉾山町の宿命なのだろう。

それが、有償なのか、無償なのか、わかりませんが。足尾町（日光市）が使用している土地が古河からの借地なのか、日光市が買収したのかわかりません。有償であるとすれば、どの位の金額なのか。古河が積極的に観光開発に投資するという動きは見られません。

「足尾歴史館」が二〇一九（平成三二）年から古河の経営になると聞いています。現在において存在する企業、商店、病院等をどのように維持していくか、足尾において大きな課題です。人口は減るばかり。高齢化はますます進むばかり。行政は打つ手はあるのか。

だけでも、案外足尾から人は去らないんです。老人たちは、なかなか、足尾から去ろうとしません。八〇歳代や、九〇歳の老人が一人で頑張っています。

なぜかっていうと隣組、隣近所が親戚みたいなもんですからね。さつき高橋先生から言われたんですが、足尾町の人をすごく知っていますねと言われたんですが、やはり五〇数年間住んでいると、教え子とか父母とか兄弟とかと顔を合わせますから。ぼくは知らないでも向こうが知っているんですね。

二〇一八（平成三〇）年一〇月三日の朝日新聞に群馬県川場村の記事が掲載されていたが、村の「道の駅」には一八〇万人の客が訪れるとのこと。この村は、村を豊かにするために、豊かな自然を生かした色々な取組みをやっているようである。銅山だけに依存した足尾との違いを認識させられる。

足尾の観光の中心である銅山観光は、一時は年間三〇万人台の入場者があったが、今は一〇万人台に落ち込んでいるようである。

閉山前後、足尾における「観光開発の振興」が大きな課題になったが、実現したのは少ないようである。行き詰まりを打開し、少しでも前進する方策はあるのだろうか。

この間もそんなことがありました。どこかにいくので車に乗せてあげたら向こうは知っているんですね。私は知らなかったのです。だから老人が住むには住みやすいんですね。

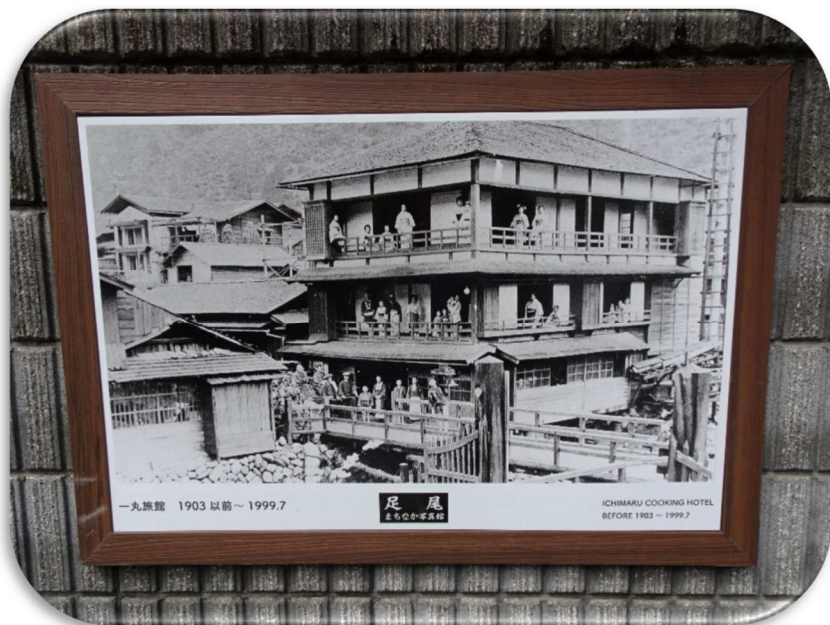
時々孤独死とか耳にします。何カ月もほったらかしなんてことは、足尾ではあり得ないんですね。せいぜい数日、長くても一週間辺りで発見されるわけです。そういう点では、鉾山特有の共同体として足尾の住み良さがあるのかもしれないですね。

昔は、鉾夫長屋には、共同炊事場、共同便所があり、家の中には台所、便所がなかったようです。浴場は各部落単位に共同浴場がありました。共同炊事場、共同浴場は、人の絆を強める要素になったのではないかと思います。まさに、井戸端会議です。鉾員と職員との間には、社宅に関しても、身分格差があったようです。

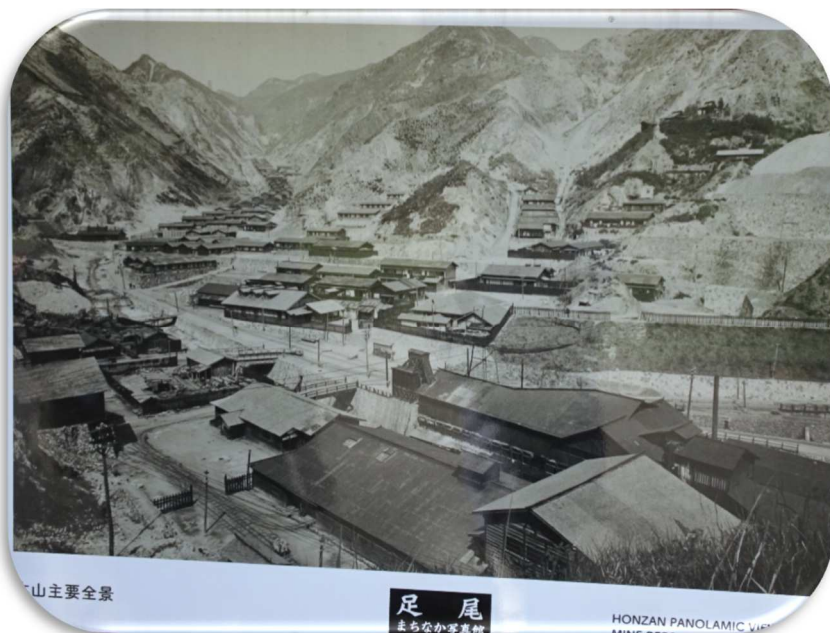
勤務した足尾高校でも、閉校近くには、一対一の授業なんてのがあって、僕は好きなんです。生徒はいないという状況になりました。

鉾員と職員の住まいの差は、広き・台所・便所・風呂の有無(課長級以上は内風呂)などがあった。

私にとって、足尾は縁もゆかりもないところだった。ただ、栃木県が父の故郷(旧絹村)であり、戦後、中国から引き上げて絹村(現在は小山市)に一年あまり住んだだけだった。父も定年退職後、故郷に帰ることを決めていたので、栃木県の教員採用試験を受けたというだけだった。一九六四(昭和三九)年に赴任。二〇〇一(平成一三)年に定年退職。三七年間足尾高校に勤務。一年間、全日制にいたが、なにかと定時制が楽しそうなので、移籍を校長に願ひ出たら、すぐさま、承諾。それから、定時制が廃止される一九七九(昭和五四)年まで定時制勤務。以後、全日制に移行。定年退職。定時制最後の卒業生は四名、私が教えた定時制最初の授業二〇名ならず、少人数教育だった。全日制でも一対一の授業(補習授業など)もあった。私は少人数教育が好きだった。



足尾町のあちこちに「まちなか写真館」が掲示されている。  
 (2018年9月23日)



「まちなか写真館」より本山地区。(2018年9月23日)

バイパスの下を流れているのが渡良瀬川です。川向こうに、足尾小学校があり、その近くに、足尾認定子供園があります。もうすぐ行くと中学校があります。小学校は建て替えられたんですが今は数十名しかいない。中学校も建て替えられたのですが数十名しかたけども、日光とかなり離れているので、まだまだ統合されるという話はないですね。だけでも運動会なんかは小中学校から合併でやらざるをえないですね。

こちらのほうは、このごろは濁る水が少なくなりましたが、ぼくが来た頃はすごかったですね。以前は、雨が降ると、松木川と神子内川の濁りが非常に違うのに驚きました。松木川の水がすごく濁っていました。ハゲ山が原因ですね。今はさほど濁らなくなりあまり差が無い感じです。それだけ植林の効果が増したということだと思います。

右側が渡良瀬溪谷鉄道の最終駅の間藤駅です。左側の工場が古河系列の鋳物工場です。以前は、製作所とっていましたが、現在は「古河キャステック株式会社」と言います。古河系列の工場として他に、砂畑に「足尾さく岩機株式会社」、遠下に「アルミ箔化成工場」

現在は小学校中学校は各一校となった。以前には町立幼稚園二校(本山・足尾)。小学校は分校を入れると六校あった(小滝・原・足尾・神子内・本山・横根山分校)。中学校(本山・小滝・赤沢の三校、創立間もなく現在地に合併。)それに高校が一校。

戦前においては、小滝小・本山小・実業学校(高校の前身)は、古河の経営する私立学校だった。戦後、町立、県立となった。

高校は平成二〇〇七(平成一九)年に日光明峰高校に統合廃校となった。いかに足尾町が、また、企業体としての古河が、教育に熱心だったかわかるだろう。

現在二〇一八(平成三〇)年、日光市立認定子供園(幼稚園と保育所が合併)が一九名、足尾小学校が三六名、足尾中学校が二七名の生徒数。本場に小規模校になった。

運動会は小中学校合同で実施。子供園は独自で行っているようである。

六〇歳以上の高齢者が五〇数%。ますます、過疎化、高齢化が進んでいく。



がありますが、今、全部で従業員がどの位居るのか。足尾としては主要な雇用先です。

これらの工場は将来どうなるのか。閉山前後、工場が誘致されましたが、その後、足尾から撤退した工場がかなりあります。今どのくらい残っているのか。

足尾の北部の繁華街で、非常に賑わった商店街でした。今も少しの商店が残り少しだけ面影がありますが、本当にさびれてしまいました。

引き込み線が製錬所まで行っています。左が戦前の古河の私立の小学校で千何百人もいたということです。木造の校舎は多分戦前の建物で、コンクリートの建物が戦後に建てられた町立になってからの建物だと思います。

以前は引き込み線が製錬所まであり、貨物が運ばれていた。

川の向こうの建物が二〇〇五（平成一七）年、閉校になった本山小学校の校舎。この学校は、戦前は古河の私立の小学校で、大正一〇年には一九〇九人の生徒がいたというマンモス校だった。古い木造の講堂があるが、この建物はいつ建てられたのか。

戦後、一九四七（昭和二二）年、町立となった。一九六六（昭和四一）年、鉄筋の校舎が新築された。閉校となった今は、かなり荒れ果てている。

ここは、赤倉広場といい、前の川には古河橋という、日本でも最初の頃の道路鉄橋があり、目の前に製錬所の跡があります。今は解体されてしまいましたが一歩は残っています。この広場では以前は盆踊りも行われていました。

ここは煙害がひどかったところです。いわゆる激害地です。いろんな方法で植林がなされてここまで緑が回復しています。だけれども、はげ山が目立ちます。もう土がないと樹木は育たないので、ヘリコプター工法とかいろんな方法でやって、かなり回復はしています。人体に対する被害については書かれた資料を私は見たことがなく、わかりません。しかし、赤倉や本山、愛宕下、高原木などの住民は煙害に特に悩まされたと思います。他の地に行ったら、喘息が良くなったという話を聞いたこともあります。じっと、我慢したのでしょうか。

私が足尾にきて上の平というところに社宅があって、ここに高校の寮があったんですが、印象的でした。町営住宅があり、高校の寮もあって、そこから私の足尾の生活が始まったわけです。

間藤から赤倉、松木一帯は煙害における「裸地」(鉋煙濃厚にして、植物成育不可能とされている。)最も煙害の酷い時であった明治の時代には、赤倉や間藤などで古河に示談交渉を行い、示談金を獲得している。まだこのころは、この一帯にも畑作地があったのだろうか。足尾では、他に唐風呂、野地又、神子内などで示談交渉が行われた。

一九五六(昭和三一)年、製錬所で亜硫酸ガスを回収し硫酸を製造する、画期的な製錬が始まった以後、本格的な植林が始まった。それ以前にも、植林は試みられたがうまく行かなかったようだ。いろいろな方法で、植林がなされ、ここまで緑が回復した。植生袋、植生盤も、担いで山に登り、植林をしたそうである。その多くの労働力が女子だったとか。土は亜硫酸ガスで酸性化していて、石灰を撒いて、土を中和させないと苗は育たなかったようである。又、緑が増えれば、鹿やカモシカ、猿などの野生動物が、木の葉や若芽などを食べるに来るわけで、それをどう防ぐか、ネットを張ったりして苦労したようだ。

上の平から、足尾の北部一帯が見渡せるわけです。印象的でした。今と比べると、まだ緑の少ない山々を眺めていると、何かせつなくなつて、足尾ダムに飛び込んで、死んじゃおうかなと思つたことも。ちようど、皐月の頃かなあ。きつといわゆる、五月病というやつですか。教師として、授業が大変で、四苦八苦していたのですね。特に機械科や鋳業科の授業が。そんなことで、一年で全日制から、定時制に移行。定時制の方が楽しそうだったから。それから三七年間、この地で教師生活。現在もまだ足尾。

私が、全日制一年で定時制に移籍してからしばらくして昭和四三（一九六八）年にいわゆる足尾高校の生徒の暴力事件が起こるわけです。私は定時制にいたので、直接は関係しませんでした。あくまでも、全日制の問題でした。その暴動の原因はいろいろ言われていますが、ひとつは新任が多かつたことと、生徒増ということですね。それから、ある本には、閉山危機とかがちらほら言われるようになっていました、とありました。

現在、野生動物が増えた。松木に人なれしたキツネがえさを貰いに寄ってくるのを何度か見かけた。いいことか、悪いことか。

栃木県関係の年表「年表栃木県の歩み」（下野新聞社）に「一九六八（昭和四三）年三月足尾高校暴力事件。生徒の留年に対して不満の生徒が校長室に乱入、器物損壊、教師二三名に殴打、負傷さす」とある。その暴力事件の原因については、色々考えられているが、直接の原因は、年表に書かれているとおり。この昭和四〇年前後は、足尾校において大きな変化の時だった。高校進学率が高まり、クラス増が行われ、生徒数が増加。それにともない、昭和三九年に（私が赴任した年）新任教員が一一名赴任という、今までにないことがあった。生徒も多様化。教師の年齢構成も変化。足尾高校では、昭和四三年以前に留年（落第）という措置はなかったのかもしれない。それが、突然校長の方針で、留年ということになり、生徒は納得出来なかつたのかもしれない。また、足尾にとつて五年後には閉山という決定的な出来事が起こるわけで、その影がないとは言えないだろう。

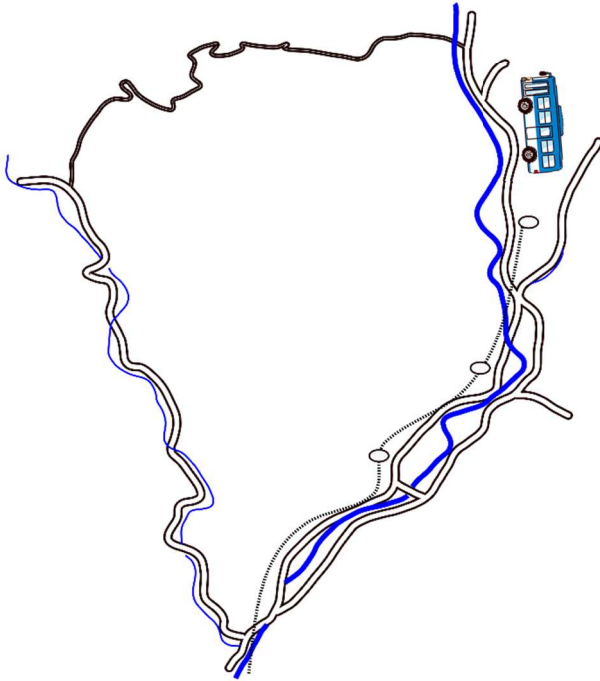


栃木県立足尾高校（現在、建物は残っていない）  
『永久に誇らんあゝ母校』閉校記念誌 栃木県立足尾高校 より



足尾高校の全景  
『永久に誇らんあゝ母校』閉校記念誌 栃木県立足尾高校 より

10. あしお四方山話 3 (製錬所)



足尾銅山にかかわる書籍には、「せいれん」を表記する際、「製錬」または「精錬」が使われている。

「製錬」は鉱石から金属物を取り出すことをいい、「精錬」はより純度の高い金属にする過程のことをいう。従って、足尾町本山に残る煙突や巨大な建造物は、「製錬所」である。



町内から臨む箕子橋堆積場。山間の谷にダムを建設して堆積場にした。(2018年11月17日)



国の重要文化財である古河橋。その向こうの建物は製錬所。(2018年9月23日)

### あしお四方山話 3 (製錬所)

製錬所の跡、上の方は太陽光発電をしています。事後処理というのは鉱山の場合たいへんです。

黒い塀は製錬のカスでできるカラミレンガです。これは製錬のカス、これをカラミというのですが、それで作られるカラミレンガです。松木の堆積場はこのカラミの捨て場です。製錬所周辺には軒並み社宅がありました。愛宕下の長屋が保存されていると、共同炊事場や共同便所も見られ、鉱夫の生活を多少見ることが出来たのです。残しておけばよかったですね。

山の上に咲いている黄色の花が、エニシダです。エニシダはマメ科の植物で、根に栄養分をためるので、植樹したようです。しかし、これは失敗ではなかったかという声もちらほらあります。生態系を変えてしまう、失敗じゃないかと。栄養分をためるにはいいらしいです。

足尾銅山は一九七三(昭和四八)年に閉山となったが、製錬所は一九八九(平成元)年まで操業を継続した。

製錬所は、最近解体されてしまった。一部は松木川対岸に残って外観がうかがえる。上の方に、太陽光発電が設置された。

古河も、堆積場の維持管理、浄水場の管理、社宅の管理など大変なようである。このためかなりの費用を支出していると思う。堆積場の管理は公的な補助があるようだが、詳しいことは私にはわからない。事業所で聞けば確かことがわかると思う。堆積場の維持管理をきちんとしないと源五郎沢堆積場の崩壊のように被害をもたらすわけである。古河の足尾事業所は企業体として維持管理をしている。

社宅(鉱夫長屋)はかなり解体され、通洞のように一般の住宅が建てられたり、また更地にして桜の木が植えられたりしている。

川向うが、朝鮮人がいた高原木。明治の頃から堆積場として使われ、その後鉦夫長屋が建ち、其の一角に、朝鮮人も住んでいました。着土して緑になりました。僕が来た頃は、全部岩石が露骨に見えていました。

一九六四（昭和三九）年に自溶製錬というのが開始されて、そこから植林が始まりました。その中心になったのが、国土交通省で緑を植えるように土地を作りました。土砂が流れ落ちないように砂防ダムを造りました。植えたのが営林署です。そのころは、植生袋とか植生盤というのがあって、すごく重いものでした。その中心になったのが主婦労働なんです。その人たちが一生懸命になって植えたという歴史があります。

これはヤシャブシです。川べりに生えているヤシャブシは多分自生だと思います。非常に公害に強い木で染料、染め物の原料になるみたいです。これは植林ではないです。

砂防ダムは戦前から下流で作れっという声があって、すごい土砂なんです。だから無数の砂防ダムがありまして、一番大きいのがこの足尾堰堤です。日本でも有数の砂防ダムと言われています。

この長屋が一九四六（昭和二一）年に撤去され、再び堆積場となり、現在の地形になった。着土して草が植えられて緑で覆われた。

一九五六（昭和三一）年に自溶製錬が開始され、本格的に植林が始まった。その中心になったのが、現在の国土交通省（以前は建設省といった）と林野庁である。国土交通省は、植林できるように、山腹基礎工などを行い、また山から流れ出る土砂を防ぐために多くの砂防堰堤を造った。足尾堰堤（三川合流ダム）は、その最大のものである。植林は林野庁が行い、その業務を請け負った赤間造林など足尾の業者が苦勞して植林をした。そのことについては前述した通りである。

現在は、「足尾に緑を育てる会」などのボランティアが中心で、植林活動を実施している。

一〇月から一月にかけて足尾の山々は、紅葉で染まる。日光ほどではないが、「緑を育てる会」が中心になって植樹した大畑沢は見事に紅葉している。庚申山の紅葉は、見事だ。



これで土砂がどれくらい防げたかはわかりませんが、渡良瀬川ではいろいろな改良工事が行われているのですが、昔のような公害の敵のような洪水は聞かれませんね。台風がきても渡良瀬川が氾濫したというのは。渡良瀬遊水地がどれくらい効果があったのでしょうか。

松木川はもっともっと深かったです。土砂が流れてきて川底が浅くなったのでしょうか。

橋を渡ると仁田元です。公害、煙害でやられるまで非常に小さな集落ですが数件ありました。この辺は久藏で古河の社宅がありました。

植林は林野庁が主体になって足尾の業者が請け負いました。その人たちが、男の人は勤めているので主婦労働が主体だったようです。歴史館にも写真がありましたし、環境センターにもその写真があります。そういう主婦労働によって稼いで、子どもを高校に入れたということもありました。炭鉱みたいに女子が坑内に入るということはなかったみたいですね。坑内労働も従事したという本もあるのですが、事実は違うみたいです。

ヤシャブシも以前は植林もされたようで、足尾の所でどこで見ることができると。

昔のように、足尾鉍毒事件の大きな原因になった、渡良瀬川の大洪水は最近に耳にしない。最近、台風の大洪水がニュースになるが。足尾の砂防ダム、また渡良瀬川の河川の改良工事が効果をなしているのだろうか。

あの谷中村を滅亡させた、渡良瀬遊水地がいかほどの効果をもたらしたのか。

足尾銅山でも坑内労働に従事したという文章を読んだ記憶があるが、事実は違うようで、女子が坑内労働に従事したことはないようだ。写真でよく目にするのは、選鉱所の手選鉱場の写真である。



松木村跡。山肌を覆っている  
黒い土砂が鰯（からみ）。

(2018年5月26日)



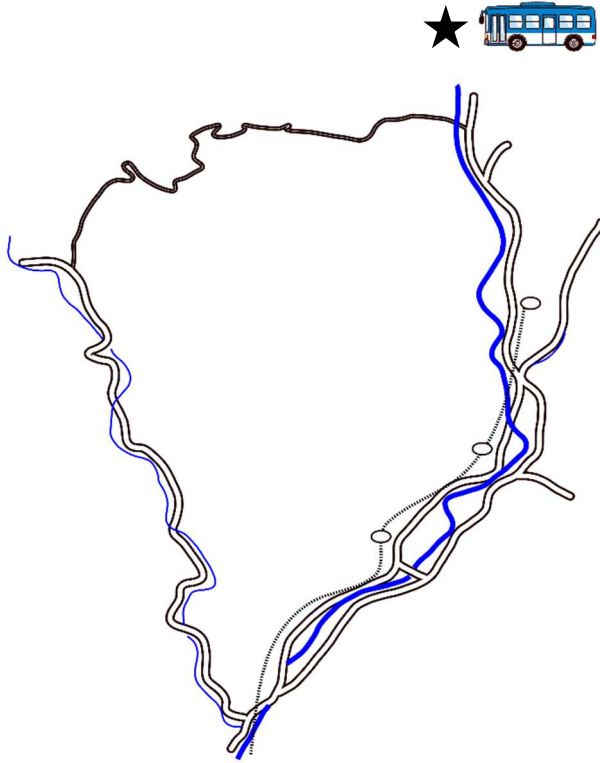
松木村跡に残されて立つ墓碑。

(2019年12月13日)

松木・足尾砂防堰堤。  
渡良瀬川へ土砂が流  
出しないように堰き  
止めている。  
(2019年12月13日)



## 11. 松木村



松木・足尾砂防堰堤は、日本で最も大きい砂防ダムである。このダムから川の水が流れ落ちていくが、堰き止めているのは水ではなく土砂である。木々が生えていない山から崩れた土砂が、下流に流出しないよう堰き止めている。松木川の谷はその土砂で埋められ、川底が高くなってしまった。

## 松木村

一三八一年永徳元年、義満の時代から住んでいるということですが。石高が九六石二〇町歩。山村というのはそんなもんですよ。一〇〇石といたら下級武士ですよ。大名になれば何万石で、高給武士になれば千石とかなりです。畑はずーっと広がっていたみたいでそういう地図があります。

人口は二六七名、明治二五年の記録があります。江戸時代にもかなりの人口があったみたいです。

二宮尊徳が今市に住んでいて、足尾にも巡った記録があります。これだけの広さの畑で自給自足が可能だった。現金収入は、養蚕がさかんで蚕を飼って取れ高が三千元。その当時の三千元はかなりの現金収入ですよ。

松木村の村民がどのような経過で田中正造を知ったのかは、わかりません。田中正造が足尾を明治三二年三月に視察していることは確かです。そのうわさを聞いたのでしょうか。松木の人たちも、足尾の町に出かけることもあったでしょうし、明治三〇年には大規模な鉞毒予防工事が行われるわけ。そこで、田中正造のことを知っ

松木の畑の作物は麦類、稗（ひえ）などの雑穀、大根、ごぼう、人参などの野菜類を栽培していたようだ。江戸時代一八五三（嘉永六）年の人口は三七戸一九八人という記録がある。

二宮尊徳が、今市に住んでいて足尾を巡った記録がある。また、山林や川があり、きのこや山菜が採れただろうし、魚もいただろうし、松木に最後まで残った星野金次郎さんは猟師であったということだ。煙害で被害を被る以前は、野生動物も多かったです。

松木村は、自給自足の出来る、ある程度豊かな、平和な山村であったと思われる。その村が、煙害のために離村に追い込まれることは、痛恨の極みだったことだろう。

一九〇〇（明治三三）年九月に農民集会を開き田中正造に救済を仰ぐことを決定。代表者に星野嘉市、星野金次郎を選び、その月に佐野に向かっている。先日、星野金次郎さんに関する講演を聞く機会があった。その講演は、金次郎さんの縁者が行ったのだが、金次郎さんは猟師でもあり顔も広かったようである。田中正造のことを知っていたかもしれないと述べていた。

たのかもしれない。

古河市兵衛が明治一〇年に足尾銅山を買った。よく本に国から払い下げられたとパツと書かれるんですが、これは事実とは違いますが。明治政府は足尾はどうしようもない銅山だと調査はしたらしいのですが、見向きもしてない。すぐに民間に払い下げています。国が管理することはなかったんです。副田（そえだ）が買って、数万円という安いお金で買いました。古河市兵衛は金が無かったので、資金援助をうけたのが、志賀直哉のおじいちゃんの相馬藩の家老だった人が援助をしていきました。あとには渋沢栄一は後では援助をしますが、こんな銅山を買ってもしようがないと絶対成功することはないと考えました。ほんとに江戸時代の末期はほとんど取れなかったですから。

でも、古河市兵衛っていうのはそういう点では先見の明があったんですね。絶対にこれは当たると。すごい、一流の鉱山主、財界人だったんですね。

煙害は、明治一〇年は銅がほとんどとれないから煙害はないんです。だいたい明治一六年くらいからぼちぼち煙害とか鉱毒が起ころうわけですね。だいたい明治の一七年には、農作物被害がぼちぼち出てくるわけです。

古河市兵衛が一八七七（明治一〇）年に、副田欣一（そえだきんいち）から四万八千円余りで山を買った。明治政府からの払い下げという文章を目にした事があるが、事実とは違う。明治政府は足尾銅山を調査するのだが、開発は見込みなしと判断したようである。そこで、県（真岡県から日光県。そして栃木県）の管轄になり、すぐに民間に払い下げになった。一八六七（明治一）年〜一八七六（明治九）年の産銅量は、年産五九トンという状況だった。

いわゆる古河市兵衛の座右名「運・鈍・根」の精神。足尾銅山は絶対に当たるといふ確信。そういう点では、すごい人である。

古河が足尾銅山を経営し始める一八七七（明治一〇）年から一八八二（明治一五）年までは、産銅量は四七トン〜二九三トンと少ない。

それが、一八八三（明治一六）年には六五三トン、一八八四（明治一七）年には二八〇七トンと飛躍的に増加する。それに従って、製錬所の設備はしだいに拡張、近代化され、亜硫酸ガスの排出も多くなってきました。（産銅量は『足尾銅山史』六二八頁）

松木一帯には三つの村がありました。欄干もない橋、あのたもとに久藏という集落があったんです。これは小さな集落で一番大きな集落が松木です。明治一八年頃から煙害が起こってくるわけです。

明治二〇年四月に大火があり、松木から発生して本山とか赤倉とか地域がぼーっと燃えた時期がありました。村が大火で消滅したという事はない、下の方へ燃え広がっていった、松木村そのものが大火にやられたという記録はありません。

明治二一年あたりから桑って公害に弱いらしくて桑がやられました。現金収入になった養蚕のための桑がやられてくるわけです。大麦、小麦、大豆、稗、小豆とかきびとか大根、人参、牛蒡とか。じゃがいもというのはその時代あったのか分からないですが。記録によるとじゃがいもはなくて、大根とか人参とか牛蒡とか五穀とか作られました。

明治二〇年代になると、足尾は大発展していきますから煙害がひどくなる、亜硫酸ガスが出てくるわけですね。亜硫酸ガスはなぜ植物を枯らすかは、ご存知ですか。銅山関連の本にはそういう基本的なことは案外書かれていないんです。私は化学には弱いのですが、亜硫酸ガスによって作物が枯れるわけです。松木以外の他のところは、内々に示談をするわけです。三円とか二〇〇円とか、古河との

仁田元は五戸二〇人、久藏村は一三戸五八人が暮らしていたという記録がある。一番大きかったのが松木村で三七戸一七八人（江戸時代の話）。

この火事で木材が高騰する事が予測され、古河は秘密裏に、木材を買いあさったという話を読んだことがある。

足尾銅山の産銅量は一八七七（明治一〇）年が四七トン一八八二（明治一五）年には二九三トンなのが、一八八三（明治一六）年には六五三トン、明治一八八四（明治一七）年には二八〇七トンと飛躍的に伸びた。一八八五（明治一八）年には四一二七トンになった。それにしがつて製錬所は一八八四（明治一七）年に直利橋製錬所（現在の場所）が開設され、近代化していくわけである。そうなれば、排出される亜硫酸ガスは多くなり、その被害はますます増大した。一八八三（明治一六）年に煙害が出始め、一八八五（明治一八）年にはかなり酷くなり、一八八八（明治二一）年には桑が全滅、翌年には養蚕廃止。重要な現金収入が無くなってしまった。明治二八年には、農作物の収穫は半減。食べるにも困ることになった。仕方なく一八九五（明治二八）年に古河と、一戸あたり二十円で示談するわけで、後々これが足かせになった。

示談を赤倉とかはするわけです。松木だけは、抜かしていました。

なぜ松木が抜かされたか、一説によると松木には被害が無いなんていう、そういうことで抜かされたとあります。でも松木は被害がひどいわけです。今日は風がないですが、谷からの風がスーときて作物がやられて、馬もよだれを垂らすようになるといわれている。

古河と示談をやるわけですが、松木がほかのところと違うところは田中正造っていうすごい人が渡良瀬川の下の方にいるらしい、その助けを得ようという声が村民の中から起こってくるのです。三〇数戸のうち二四戸、本によっては二五戸というものもあるのですが、それらが立ち上がってくるわけです。彼らは果敢な運動を始めるわけです。だから古河は驚いちゃったわけです。今までの示談とは違うと。松木は、田中正造なんていう人物と提携しながらやりだした。松木について書かれている本はいろいろあって、栃木県史の中にもありますが、星野嘉市さんが書いた「足尾銅山の鉍烟毒の事件」があります。それを読むと、なかなか面白い動きが非常によくわかる。それを読むと足尾町の有力者が闘いをやめて適当なところで示談しろ示談しろ、とくるわけです。古河と戦ったってしようがないんだから、戦うのをやめて適当なところで示談しろとくる。

一八九七（明治三〇）年に「鉍毒予防工事」が行なわれ、小滝の製錬所が閉鎖され、直利橋製錬所に併合された。一八九八（明治三一）年に煙害を予防する「脱硫塔」が完成するが、予防するどころかますます煙害が酷くなってしまった。この年には、農作物の被害は激増し、ますます、生活に困るようになった。身体にも影響が始め、産児は天死し、生母は乳が出ず亜硫酸ガスにやられた草を食べた馬が死ぬという状況になった。

一九〇〇（明治三三）年に農作物が全滅する事態になった。そこで、松木村の村民は集会を開き、田中正造の助けを借りる事を決議する事になった。古河の地元足尾においても小滝の製錬所によって被害の大きかった唐風呂が訴訟を起こし、敗訴するという歴史、また、製錬所に近い北部（赤倉間藤など）地区の示談交渉などがあったわけだが、この示談交渉は、町の有力者（寺の住職など）が仲裁する形をとる方法だった。それに対して田中正造という外部の力を借りる示談交渉は今までにない闘争だった。村民二五戸が金を出し合い、代表者を佐野に送り出した。一九〇〇（明治三三）年から翌年にかけて果敢で精力的な活動を展開した。





植樹喚起の看板（2019年12月13日）



植樹をする学生（2015年6月17日）



でもそれに負けないんですね。それで、山を越えて中禅寺湖に行  
って日光に出て、日光線を多分通ってたと思うのですが、日光線に  
乗って、佐野行って田中正造に会うというわけです。田中正造は  
なかなか忙しい男ですから、なかなか郷里に帰ってこない。その時、  
佐野に足尾銅山鉍毒被害救済会があってそこを頼りました。

そこに、山田友次郎とか玉生嘉寿平、広瀬勝三郎とか活動家がい  
たんですね。この山田友次郎というのは田中正造の縁戚に当たると  
思います。そういう人たちの援助をうけました。そして、一坪運動  
なんかも起こるんですね。その証拠はあるんです。これは、上岡健  
司さんという熱心な方がいて登記書まで調べているんです。いろん  
な歎願運動をするんです。足尾町あたりに歎願して税金が払えない  
から税金免除してくれといっても相手にしてくれない。鹿沼税務署  
に行っても相手にしてくれない。唯一栃木県で相手にしてくれたの  
が県会なんです。

県会っていうのは田中正造も議長をやったことがあります。か  
なり人民のことを考えてきちっとやってくれる。彼らは命がけで  
から食うか食えないかの問題ですから、あらゆるところを回ったみ  
たいですね。内閣総理大臣とか内務大臣とか、貴族院議長とか衆議  
院議長とか。栃木県史に書いてあります。直接にあつてくれたかは

そのことについては、星野嘉市さんが書いた「足尾  
銅山の鉍烟毒の事件」という冊子によく描かれて  
いる。

星野嘉市さん・・・この方は松木に住み、田中正造  
に会う為の代表を務めた人でした。

書いてないですが、嘆願書、人命救済嘆願書を渡しました。

足尾町とか上都賀役所とか栃木県庁とかは行っても拒否される、非常に冷たいです。役場には免税の書類を出すわけですが、役場にしても鹿沼にしても相手にしてくれないんです。

田中正造にも直接会っているようですね。それから田中正造の伝記を読んでもよく出てくる島田三郎、文学者の木下尚江、憲政本党とかですね。だから古河はびっくりしたんですね。びっくりしますよ。今までの闘い方と違うと。

その時の所長だった近藤陸三郎、これは有名な小説家舟橋聖一のおじいちゃん、母方のおじいちゃんです。すごい重役がいて技術者でした。その人もこれはどうしようもない、今までの示談金ではだめだと考えたのでしょう。要求は七万五千円だったんですがそんなには払えない、時価の何倍でそれで妥協しようじゃないかというところで、その時の示談額が総額四万円でした。予防工事に百万円ほど使ったと言われています。ある人はこれは今の一千億円に相当するのではないかといっています。それは妥当か。

よく例に使うのですが、夏目漱石が松山中学の教諭になった時の月給が八十円（明治二八年）、朝日新聞に入社した時が月給二百円（年にすると二千四百円・明治四〇年）。彼も高給取りだったので

一八八七（明治三〇）年から一九〇一（明治三四）年にかけては、鉱毒予防工事命令、田中正造の帝国議会で追求、渡良瀬川の大洪水、沈殿地の決壊、鉱毒被害激化、古河市兵衛夫人の自殺、田中正造の天皇への直訴等々があった。鉱毒事件に対する世論が高まった時だった。古河は神経を尖らしたと思う。

松木村の二五戸の示談金が七万五千円の要求に対して、総額四万円。この金額が何百年と生活した村を古河に売る事になるわけで、妥当かどうか。しかし、生活基盤が破壊され、窮乏に苦しんでいた松木村民にとって四万円が妥協する事は仕方なかったのではないか。これ以上闘う事は困難だったと思う。

がそれでも不満だったらしいです。高級官僚になると数千円ですね。お雇い外国人になると、ある本では五千円とか書いてあるんですよね。そんな給料と比べて、二五戸において四万円、土地によってわけて一律五百円ずつ払い、それにプラスアルファして多い人でだいたい二千円です。少ない人が六百円ですね。だけど、松木村民はそれに対して非常に感謝するんです。これは、今から考えると、数百年住んでいたのに、古河の都合で追い出されるわけですが。

それでも、この四万円というのは、彼らとても感謝して関係者にいろんなものを毛皮とかを贈るんですね。松木が豊かだったのは、養蚕とともに山の物、きのこか木材とかあったからです。作物が採れないときは、下駄を作って日光へ売りに行ったという話も聞いたことがあります。山の獣、銃もあつたみたい。そういう贈り物や謝礼金を払ったんでしょう。そういうふうに感謝しています。

星野さんは日光市内に住んでいます。長野に行ったという話も聞いたことがあります。

そんな風にこの村を去っていったわけです。

星野金次郎さん一家は、その後も松木に残った。なぜ残ったのか。農業も出来ない土地でどう生活したのか。

金次郎さんは田中正造が亡くなった時、香典を十円出したという話がある。その時の十円はかなりの額だったと聞く。きつと、田中正造に対する想いが強くあつたのだと思う。金次郎さんは、一九五一（昭和二六）年に足尾で波乱に満ちた生涯を閉じ、一九五四（昭和二九）年に金平さんも松木を去り、上間藤に住んだ。

金次郎さんは猟師のかたわら鋤の柄や下駄を作って売っていたとの話もある。また会社（足尾銅山）の水番（水源地の松木川の管理者）をしていたのも。何らかの生活手段は持っていたのだろうか。

大正年間になって鉄索という空中ケーブルですね、製錬所から松木の山の方に引かれて、製錬のカス最終工程のカラミを捨てたわけです。僕が来た頃は、歩いてくると真っ黒だったんです。何たる風景かと驚きました。

このカラミは使えるんですね。コンクリートの骨材とか道路に敷くとか、横須賀へ持って行って船の洗浄に使うらしいです。船は貝殻とかつくので、それを洗うために使います。カラミは有害だとよく言われるんですが、別子銅山の写真を見ると、製錬所からトロツコで海に捨てている写真があります。これは確かだと思うんですが。

だからカラミというのは、選鉱所で出る選鉱の滓（カス）いわゆるスライムとか廃石とかと比べると、毒素は少ないかもしれません。カラミは鉄分を多く含みます。これから鉄を採ろうと思って実験して不成功に終わっています。でもカラミが有効に使用されていることは確かです。

山肌が見えてきますね。あれは廃石ではなくて山肌だと思います。あの白っぽいのはスライムだなんて言われますが、スライムは捨てるどころの沈殿池がありますからここまで持つてくることはないと思うので、ここで捨てられたのは主にカラミだと思います。

古河の足尾事業所では閉山後の堆積場の保全・管理をしている。坑内廃水の管理等、かなりの経費を使用して、万全を期していると説明している。現在稼働しているのは中才浄水場と箕子橋堆積場である。

スライムは他の堆積場に捨てているはず。ここまで運んでくる事はないと思う。

廃石はあるでしょうが。古河はカラミの有害性、地下水についてはちゃんと浄水場、間藤の浄水場で処置していると言っています。

だから今は足尾でやっているのはほとんど後始末で生産的な仕事はあまりないんです。第二会社としてキャステックとか、削岩機とかアルミとかの工場がありますが。後処理って古河のお金で全部やるようです。鉱山というのは残っても閉山になっても、日本全国いたるところにあります、事後処理が重要です。

---

古河の足尾事業所関係としてアルミ箔の製造工場がある。その他、古河系列の企業として、古河キャステック(株)や足尾さく岩機(株)がある。

昔は、日本全国に数多くの鉱山があったわけだが、その後始末をする義務が鉱山にはあるわけで、それをきちんとしないといけないわけである。

堆積場の保全、管理等に国などからの補助金が出ているという話を聞いたことがある。確かなことは分からない。

ほかに、足尾では源五郎沢堆積場の決壊が問題になった事ある。源五郎沢堆積場はわたらせ渓谷鉄道の原向駅の近くにある堆積場である。

## 《補足説明》

○感謝の贈り物について

松木村民は一九〇二（明治三五）年一月から二月にかけて、世話になった人たちを訪ね、礼を尽くします。カモシカの皮を買って、救済会会長村山半、また玉生、山田の三氏に贈ります。松木は山村であり、足尾としては比較的広い土地とはいえ、平野部の農村から比べれば猫の額と言えるほどの土地なのでしょう。しかしそこで四〇戸、二六〇人が食べるのに不自由しない生活をおくることのできたのは、農作物の収穫、養蚕の現金収入、山のもの（薪や山菜きのこなど）、星野金次郎さんなどの猟師としての生活があったのでしょう。その村が、煙害によって村を追われる歴史。文明とは何か。近代とは何か。富国強兵、殖産興業とは何か。考えさせられます。

この離村以前の二八九七（明治三〇）年に、松木から栃木県那須加治屋の西郷農園に移住した人達がいきました。七戸です。この西郷農園は西郷従道（西郷隆盛の弟）が造った農園です。西郷従道はその孫が古河

家の養子になるなど古河家と関係の深い家系です。その農園に松木の住民が移住したのはどのような経過だったのか。銅山が斡旋したのかは不明です。

○星野嘉市さんについて

日光市内に住んでいました。子孫で日光の湯本に住んでいる方もいるようです。また今市在住の子孫もいるようです。太田貞祐さんの著書「足尾と銅山の物語」によると、「かつてNHKから、この松木の無縁塔が全国に放映され、それを機に松木村住んでいた者や、松木ゆかりの者たちによって「松木会」が結成され、皆から押されて会長になった星野恒次氏（星野嘉市さんの子）は、以来毎年松木村の祖先の苦勞を偲び、公害の絶滅を期待して私の父の住職から、この無縁塔の前で先祖の供養を受けた。」とある。現在、この松木会はどうなっているのか。昔、長野に行った人もいるという話を聞いた事もあります。一八九二（明治二五）年には人口二六七人、一九〇一（明治三四）年には一七四人、この人たちの子孫は今どうしているのでしょうか。

うか。

○松木堆積場について

松木堆積場は一九二二（大正元）年に堆積が開始され一九六〇（昭和三五）年に休止となります。堆積量は、1,938,150<sup>m</sup>。現在稼働している簗子橋堆積場を除くと最大級です。この堆積物を運んだのが、鉄索（架空索道）という空中ケーブルです。



松木村から松木川対岸の山を臨む（2019年12月13日）

## あとがき…足尾を語る生沼勤氏

\* \* \*

足尾町は、足尾銅山という日本有数の銅山があった鉱山町である。古くから足尾に住む家の人、銅山に係して足尾に住む人、商工業を営む人など鉱山町といえども多様な人々が住んでいる。そして住民一人ひとりにそれぞれの足尾があり、その想いはこれまでも記録に残されてきた。(例えば『町民がつづる 足尾の百年』「明るい町」編集部や、日光市足尾地域生活史聞き取り事業 日光市役所ホームページ

[<https://www.city.nikko.lg.jp/tikisinkou/ashiokikitori.html>] など)

それでは、私たちが出会った生沼氏ほどのような背景からどのような足尾を私たちに見せてくれたのか。そしてその語りの意義はどこにあるのか。本冊子では「朝鮮人強制連行犠牲者慰霊碑」と「松木村」のページに多くの紙面が割かれることになった。という話題で始まった生沼氏との会話を手掛かりに、この問いを辿っていきたい。

### 《足尾に来るまでの思い出》

生沼氏は一九四一（昭和一六）年横浜で生まれ、父親の仕事の都合で幼少期の二、三年ほどを中国で過ごした。中国に住んだことは、「私の人生にとって重要な出来事だった」という。

終戦後、父親は中国に抑留されたまま、生沼氏は家族とともに帰国し、父親の故郷である栃木県で一年ほど暮らした。まだ五、六歳のころである。

「母と兄弟3人、命からがら帰ってきました。私は小さいころいじめられっ子のほうでしたね。父のいない家庭で、「シナ人、シナ人」って近所の子どもにからかわれたこともあったな。」

太平洋戦争中の中国は敵国であり、「シナ人」は侮蔑の対象となることが多かった。この言葉も終戦直後に子どもが放った些細な戯言だっただろうが、幼かった生沼氏



の脳裏に深く刻まれている。

栃木県で一年ほど暮らし、帰国した父親とともに家族全員で三重県の伊勢地方に移り住んだ。生沼氏にとって伊勢は、足尾に五十年近く暮らしていても、変わらず自身の故郷であるという。

「父が帰ってきて、伊勢に行きました。小中高ずっと伊勢。それで小学校の時に、同じ学区に半朝鮮人の金君という子がいて親しくしていましたね。金という姓だったが大野とも名乗っていた。それから、彼も差別されることがあったけど、仲良くしていましたよ。こういう幼いころの経験から差別に関心があったんだな。」

金君と仲が良かったのは生沼氏が級長だったから、という訳だけではなかっただろう。「差別」に関心があったのはもちろんのこと、弱い立場の側に寄り添う想いもこのころ既に持っていたということだ。

「伊勢で住んでいた地区の隣合わせに、被差別部落があったんだよね。大学では部落研究会や社会科学研究会に入ってマルクス主義なんかを勉強したり、いろいろな文を読んだり。ずっと権力に対して問題意識があったということですよ。」

同志社大学の学生のころは主に文学で「差別」や「権力」に関心を持ち続け、知識を蓄えた。最近では、生沼氏のいう「雑文」や「民主文学」をよく読むようになったそう。八十歳となる今でも、読書を好み、「差別」や「権力」に対する問題意識は薄らいでいない。

### 《足尾に来てからのこと》

大学卒業後は、栃木県立足尾高校の教員となり、足尾に住むことになった。赴任して一年後、定時制への異動希望を出した。すぐに採用され、定時制が廃止されるまで教鞭をとった。生徒会や演劇部で生徒たちを熱心に指導したそう。

「生徒たちは本当によくやりましたよね。昼間は職場で働いて、そのあと高校へ来て。部活動もやって。」

と時間のやり繰りが大変だった定時制の生徒たちへ、今でも温かい言葉を向ける。

ところで、県立高校の教員は他高校への異動が定期的にあるものだ。ところがなぜ、生沼氏は着任から定年まで足尾高校に勤めたのだろうか。

「校長から何回も異動の依頼がありましたよ。断ってた。足尾高校にずっといたのは、意地みたいなものです。教員からいじめにもあつて。教頭にはかなりいじめられて、それでも居たのは意地。」

学校の仕事、校務分掌でもアウトサイダー的な役割ばかりになって。でも、教員というのは仕事は必ずあるんです。会社員だと窓際に追いやられて仕事はなくなるというところもあるんでしょうが、教員は、教科を教えるということは必ずあるので、仕事はあるのでやりました。」

「いじめ」では心身に影響が出るほどの困難もあったそうである。校長や教頭が高校の経営のことも考える一方で、生沼氏は生徒のことを想い、意見が対立することもしばしばだった。生沼氏の目には、赴任してやってきた足尾にも「権力」や「差別」がここかしこに見え隠れしていたのだろう。

高校では社会科の教員だったこともあり、常々足尾の歴史に興味を持っていた。足尾高校を定年退職した後、

「足尾の環境と歴史を考える会」を仲間と共に立ち上げ、活動を始めた。

「退職と同時にやっただすよね。かなり盛大な設立の会なんてやっただす。講演会、例えば、足尾暴動四十年とか、水俣病で有名な原田正純先生の講演会、村上安正さんを囲んで労働運動の歴史とか。いつの間にか自然消滅。まだ名前の上は存続しているんですけど、活動を停止しています。」

この会の活動とともに、足尾の観光についての提言を新聞に投稿するなど、足尾への想いを精力的に発信したこともあった。足尾のことをより深く知るために、永年資料も収集した。その量は自宅近くに書齋部屋を持つほどにもなった。現在、この「足尾の環境と歴史を考える会」は、名前こそ残っているものの自然消滅状態だそう。その理由の一つを

「八十歳近くになってほんとに意欲を無くしてしまった。それに僕自身は組織人としてはだめなんですよね。」

とつぶやく。組織を盛り上げて、仲間と共に問題にあたるのではなく、いつも仲間の一歩後方から足尾を見つめ、思慮を深めてきた。そんな生沼氏の姿が思い浮かぶ。

### 《フィールドスタデイのガイドとして》

生沼氏には二〇一五年からフィールドスタデイのガイドをお願いしている。二〇一八年に高橋教授と編者と二人で足尾町を訪れた時などフィールドスタデイ以外

でも、銅山に関わる施設を案内してもらった。生沼氏と高橋教授との出会いは、

「偶然なんですよ。高橋先生が植樹を兼ねて（フィールドスタデイを）やるっていうときにだれか講師はいないかと「足尾に緑を育てる会」に聞いて。多分神山さん（当時の「足尾に緑を育てる会」会長）が僕を紹介して、それでガイドをしたんですね。今考えればもっともっと勉強しておけば・・・と思うんですよね。」

生沼氏はガイドのために、それぞれの見学場所について資料を詳細に調べ直したり、松木村に関わる講演会に足を運び新たな情報を追加したりしている。そのガイドは、銅山を発展させた古河鋳業（現古河機械金属株）のこと、過去から現在までの足尾町住民のこと等々、町の多面的な情報を含んでいる。

フィールドスタデイに参加した学生らは、戦時中の朝鮮人や中国人のように「権力」に振り回され「差別」された人々がいたことを知る。煙害が原因で廃村となった

村があった、その場所に立つ。生沼氏の語りとともに、町中を見つめていくのだ。

「足尾にはそういう苦境の中で生活する人々がいたということを知ってほしい」と生沼氏はいう。

### 《ガイドの内容を冊子にする》

二〇〇六(平成一八)年、足尾町は日光市と合併した。現在、足尾町の住民数は千六百人余りとなり過疎化と高齢化が止まらない。小中学校は統廃合が進み、子どもの人数も年々減ってきている。こうした現状で、「足尾」を語り継ぐ人もいなくなるのではないかと、だれもが危惧している。しかも、足尾町には歴史資料をまとめた「町史」も制作されていないのだ。従って、生沼氏のガイドを文字にすることは、足尾の歴史と現状を書き留めておく、というだけでも意義がある。

ところが、本冊子の制作にご協力をお願いした際、

「僕は足尾生まれじゃないから体験した話は少なくて、資料からの説明ばかりになってしまふ・・・。」

と謙遜された。もちろん足尾や古河鋳業のことをよく知る人は他にもいる。その方々に経験や知識、思い出を語ってもらうこともできる。

現在の足尾の住民の多くが足尾に生まれ育った。足尾の住民が、生活インフラの中心的存在であった古河鋳業と何らかの繋がりがあことは、本冊子からも窺える。そうした生活環境の中で、自らの故郷の負の部分さえも調べ、忌憚なく話すことが出来る人はどのくらいいるだろうか。

生沼氏は、五十年前に社会科の高校教員として足尾にやってきた。以来、歴史に興味を持ち、分からないことは資料を収集して調査し続けた。時には驚きを持って足尾の町を見つめ、新しい情報も吸収してきた。さらに、足尾で結婚され、地域に根を下ろして生活する中で体験した五十年の経緯を糧として、発信力へと昇華させた。その過程で「足尾の環境と歴史を考える会」を発足させ

歴史の継承に努めたり、足尾のガイドを引き受けたりもしてきた。本冊子は、生き証人でもある生沼氏が語る、あるがままの足尾という点で、ユニークな記録と位置付けられる。

足尾銅山が閉山して半世紀近くが経った。現在、足尾銅山に関わる建物は次々に取り壊され、往時の様子を見ることが次第に難しくなってきた。一方で、植樹の効果があつてか煙害で荒地となつた山々には緑が増え、「自然」が戻ろうとしている。こうして足尾の景色はだんだんと変わってきている。

しかし、目に見えるものが変わっても忘れてはならないものがある。足尾の歴史は未来への教訓として、語り継いでいかねばならない。そのためにも、たくさんの人に今の足尾を訪れてほしい。できればこの冊子を携えて生沼氏の語りは、必ずあるがままの足尾を蘇らせてくれるはずである。



足尾砂防ダムの前で。左から高橋教授・生沼氏・匂坂  
(2018年9月23日)

## あとがきによせて 高橋若菜

生沼先生に初めてお会いしたのは、二〇一三年に合同授業の一環で、足尾のフィールドツアーを実施した時だった。福島原発事故を受けて、公害を繰り返さないよう歴史に学ぶ必要性を痛感していた。植樹をご指南いただくNPO法人 足尾に縁を育てる会に、足尾の光と影を多面的に語ってくれる方をと、推薦をお願いした。ご紹介いただいたのが生沼先生だった。

「物の本によれば、」というの、先生の口癖でおられるようだ。その手元には、細かな字がびっしり描き込まれたメモが何枚もあった。移動のバスの中でも、あーこの中才浄水場はね、小滝の里の昔は、と、語りはつきない。歴史が先生の中に宿っている。博識に驚いた。こういう意見もあれば、こういう見方もある、など、どちらかに加担するでなく、真実を探究するという姿勢に、ブレがなかった。穏やかながら毅然として、生徒に語りかけるその眼差しはあたたかかった。足尾の最高学府たる足尾高校で、長年社会科学を教えてこられ、外部から来ら

れ、半世紀を生き足尾に骨を埋められる覚悟の、生沼先生ならではの語りだった。利害を超えて縦横無尽に歴史に迫る姿に、在野研究者の気骨をみせていただいた。

足尾の見所は実に多い。一日という限られた時間でどこを回るべきだろうか。悩ましい選択ながら、ここも行っておくべきですね、と生沼先生が推されたのが、中国人殉難烈士慰霊塔であり、朝鮮人強制連行犠牲者慰霊碑だった。通常の足尾ツアーからは外れる場所を、なぜ先生はあえて選ばれたのか。句坂さんの解説を読み、この疑問が氷解した気がする。そしてその視座は、環境社会学が目指すところとびたりと一致している。

なにか環境破壊が生じた時、それを生み出した人々やそれによって利益を受ける人々（Ⅱ受益圏）と、それによって被害や苦しみを受ける人々（Ⅱ受苦圏）が存在する。受益圏にとっては合理的行動であったとしても、それが累積した結果、受苦を産んでしまう。環境問題とは、この“社会的ジレンマ”が際限なく続いている状態をさす。ここで、重視すべきは、不可視化されがちな被害者、居住者、生活者の視点だ（飯島伸子、船橋晴俊他）。

「苦境の中で生活する人がいたことを知ってほしい」という先生の眼差しは、田中正造の「民 声叫べ」（一九一九、底辺の人民に学ぶ）とも通底する。

加えて、この視点は、問題解決に向けて知恵や方策を編み出す上で欠かせない。リオ宣言（一九九二）の「環境問題は、それぞれのレベルで、関心のあるすべての市民が参加することにより最も適切に扱われる」という。「弱者をまなざすことは国際的にみても普遍性がある。」

ちなみに、編者である匂坂さんも、これらの視点を持ち合わせていることを、補足しておきたい。宇都宮大学大学院で文学史を専攻していた匂坂さんは、二〇一一年の福島原発事故以降、福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクトのコーディネーターに着任した。複数大学の教員が、放射線被ばくに脆弱とされる乳幼児・妊産婦の苦境を可視化させエンパワーに努めた試みである。自らも子育て中の匂坂さんには、この大災害は他人事ではなかっただろう。データや語りにも丹念に向き合い、教員たちによる被害の可視化に、欠かせない存在となった。実は、足尾の歴史探訪も、このプロジェクトから発している。匂坂

さんが最初に同行したのが二〇一五年のことである。この時に資料整理をお願いして以来、目を輝かして足尾の古文書に没頭されるようになった匂坂さんは、その熱が高じて、博士課程に進学されることになった。

生沼先生は、毎年、だんだん体が厳しくてね、今年でもうこれが最後とおっしゃる。ご謙遜も強い。そのなかで、ぜひと乞うてフィールドワークにお付き合いたいだいていたが、二〇一九年より停止せざるを得なくなった。新型コロナウイルス禍である。その中でも、生沼先生と匂坂さんの往還は続き、本書の完成へと至った。

「受苦」を可視化させ、苦い歴史を直視し引き継いでいくことは、二度とこのようなことを起こさないようにするための道標となる。そういった意味でも、この冊子が多くの方の手に取られることを心より祈念したい。私も在職している限り、生沼先生の語りを授業で使わせていただこうと思う。しかし、先生の中の歴史にこれだけで触れられたとは思わない。先生には、これからも長生きしていただき、少しでも良いから、命ある限り、お言葉をお聞きしたいと思っている。

## 編集後記

本書ができあがるまでに四年近くを要した。この間、生沼氏とは静岡県―栃木県という遠距離間で編集をしなければならず、またコロナ禍や生沼氏の大病による体調不良で編集作業を中断した時期があった。一時は、完成しないのではないかとさえと思ったこともあった。

それでも、生沼氏からは加筆修正のためのお電話を幾度もいただいた。とくに「補足説明」作成では、ご高齢を押しして気力を振り絞り、ワープロに向かったそうである。編者の力不足にも関わらず、いつも丁寧にお話しくださった生沼氏に心から感謝申し上げます。足尾にはまだまだ行かなくてはならない場所、生沼氏の説明が必要などころがたくさんある。ご体調の十分な回復を願うばかりである。

宇都宮大学国際学部高橋若菜教授には、足尾への同行や本書作成のご助言をいただいた。心より御礼申し上げます。内田啓子さんをはじめ環境と国際協力研究室のみなさんにもご協力いただいた。また科研費「語り継ぐ存在

の身体性と関係性の社会学」(代表者、関礼子立教大学教授)からはご支援のほか、研究会メンバーの先生方より多くのご示唆をいただいた。心より感謝申し上げます。

【本冊子の第一刷は、科学研究費「語り継ぐ存在の身体性と関係性の社会学」(〒P17KT0063)と宇都宮大学国際学部部長裁量経費、第二刷は二〇二二年度国際学部ミッション達成支援経費と令和四年度大学院生研究奨励金の支援を受けて作成しました。】

### 語り継ぐ足尾1―生沼勤氏の語りとともに―

二〇二二年一月三〇日 第一版第一刷発行

二〇二三年二月一日 第一版第二刷発行

話者・著者 生沼 勤 (元栃木県立足尾高校教員)

著者・編者 匂坂宏枝 (宇都宮大学国際学研究所  
博士後期課程)

監修 高橋若菜 (宇都宮大学国際学部教授)

発行所…宇都宮大学国際学部 環境と国際協力研究室  
〒三二一・八五〇五 栃木県宇都宮市峰町三三〇



写真 上 足尾砂防堰堤の上から松木村方向を臨む・松木川

中 廃校となった本山小学校の講堂

下 小滝の里に残る階段

表紙デザイン…大石美由紀

